

大 阪 府 茨 木 市

平成14年度発掘調査概報

平 成 1 5 年 3 月



茨 木 市 教 育 委 員 会



東奈良遺跡 最終面全景 東調査区（西から）本文26P～



東奈良遺跡 最終面全景 西調査区（北から）本文26P～



東奈良 SK501 土層断面（南から）



東奈良 SK501 出土土器（東から）



東奈良 SK516 土層断面（南から）



東奈良 SK516 遺物出土状況（南から）



東奈良 SK447 層断面
(炭化米出土土坑・南から)



東奈良 西調査区南断面図
(SD451・北から)

はじめに

わたしたちのまち茨木市は、大阪と京都との間に位置しており、古より交通の要衝の地にあります。

古代の茨木の地域の様相は、淀川の下流域の河内潟の北岸にあたり、北西には千里丘陵が連なっています。この河内潟に近い遺跡としては平成10年に人面付き土器の出土した目垣遺跡や昭和48年に銅鐸の鋳型等が出土し、さらに平成11年には東奈良地区画整理事業に伴う発掘調査で、小銅鐸が出土した環濠集落の東奈良遺跡が著名です。縄文時代晚期の灌漑水路と見られる井堰跡と無数の足跡のついた水田跡が見つかった牟礼遺跡は、稲作が早くから行われていたとされる全国的にも珍しい遺跡として知られています。

また、この地には紫金山古墳、耳原古墳、將軍山古墳、太田茶臼山古墳などの数々の古墳もあり、古墳時代から律令制の確立される時代にわたってつく三島地域の歴史の重要な役割の一部を担ってきた地域と考えられます。

平成7年の阪神・淡路大震災後、一時途絶えかけていた開発事業の動向も回復のきざしがみられ、市街地では近年急ピッチで共同住宅の建設等が進みつつあり、北部丘陵地帯では彩都の開発も大規模に行われています。

そのような開発に伴い、遺跡が破壊される場合は埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その記録を保存しているところです。

この冊子は、平成14年度に行った発掘調査についてその概略について述べたものです。
調査にあたって、惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温いご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成15年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 大橋忠雄

目 次

はじめに
例 言	1
茨木市遺跡分布図	3
平成 14 年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	4
1. 中条小学校遺跡（新中条町 39-4）	5
2. 総持寺遺跡（総持寺一丁目 384-1）	11
3. 穂積廃寺跡（上穂積三丁目 350-1 他）	14
4. 安威遺跡（十日市町 420-1 他）	19
5. 安威城跡（安威二丁目 2016 他）	21
6. 中条小学校遺跡（新中条町 91-2）	23
7. 東奈良遺跡（東奈良三丁目 405-2 他）	26
8. 春日遺跡（春日二丁目 189-1）	48
9. 牟礼遺跡（末広町 913-2）	53
10. 郡山遺跡（郡五丁目 867）	55
11. 東奈良遺跡（東奈良三丁目 418-1 他）	57
12. 東奈良遺跡（東奈良三丁目 413-1 他）	62
13. 春日遺跡（上穂東町 132-1）	69

例　　言

1. この概報は、茨木市教育委員会が平成14年度に実施した発掘調査事業報告です。
2. 本書に使用した地図は「国土地理院1/25,000高槻・吹田」・「茨木市地域計画図1/2,500」である。

平成14年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1. 平成14年度発掘調査事業

茨木市における平成14年度の発掘件数は18件で、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は199件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業13件、公共事業5件です。公共事業は、道路・庁舎建設などで、民間事業では共同住宅建設工事や倉庫・老人福祉施設・保育所の建設工事などでした。

発掘調査件数は前年と比較してやや多く、確認試掘・立会調査件数も増加傾向を示しています。

特に、社員寮の立替や工場・グラウンド跡地などの民間企業の土地の売却が進み、大阪・京都の大都市圏から近く、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられます。

2. 平成14年度発掘調査における主要な調査の概要

平成14年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、注目したい調査としては、東奈良遺跡の調査があげられます。

東奈良遺跡は、昭和48年から翌年にかけて銅鐸を鋳造していた鉄型やふいごの羽口等が出土し、平成11年には東奈良土地区画整理事業に伴い、都市計画道路と区画道路部分の発掘調査により舌のついた朝鮮半島系とみられる小銅鐸が溝底から出土しました。この調査は平成12年までの長期に渡って実施されました。

平成14年には道路以外の換地に民間の開発がはじまり、共同住宅や保育所・老人福祉施設などが計画され、順次発掘調査が実施されました。

この概報にその一端を記載していますが、未だ空地もあり今後の調査が見込まれ、この東奈良遺跡の環濠集落としての全体像が明らかにされてくるようになるものと考えられます。

用語等

SK：土坑

SD：溝・河川

SE：井戸

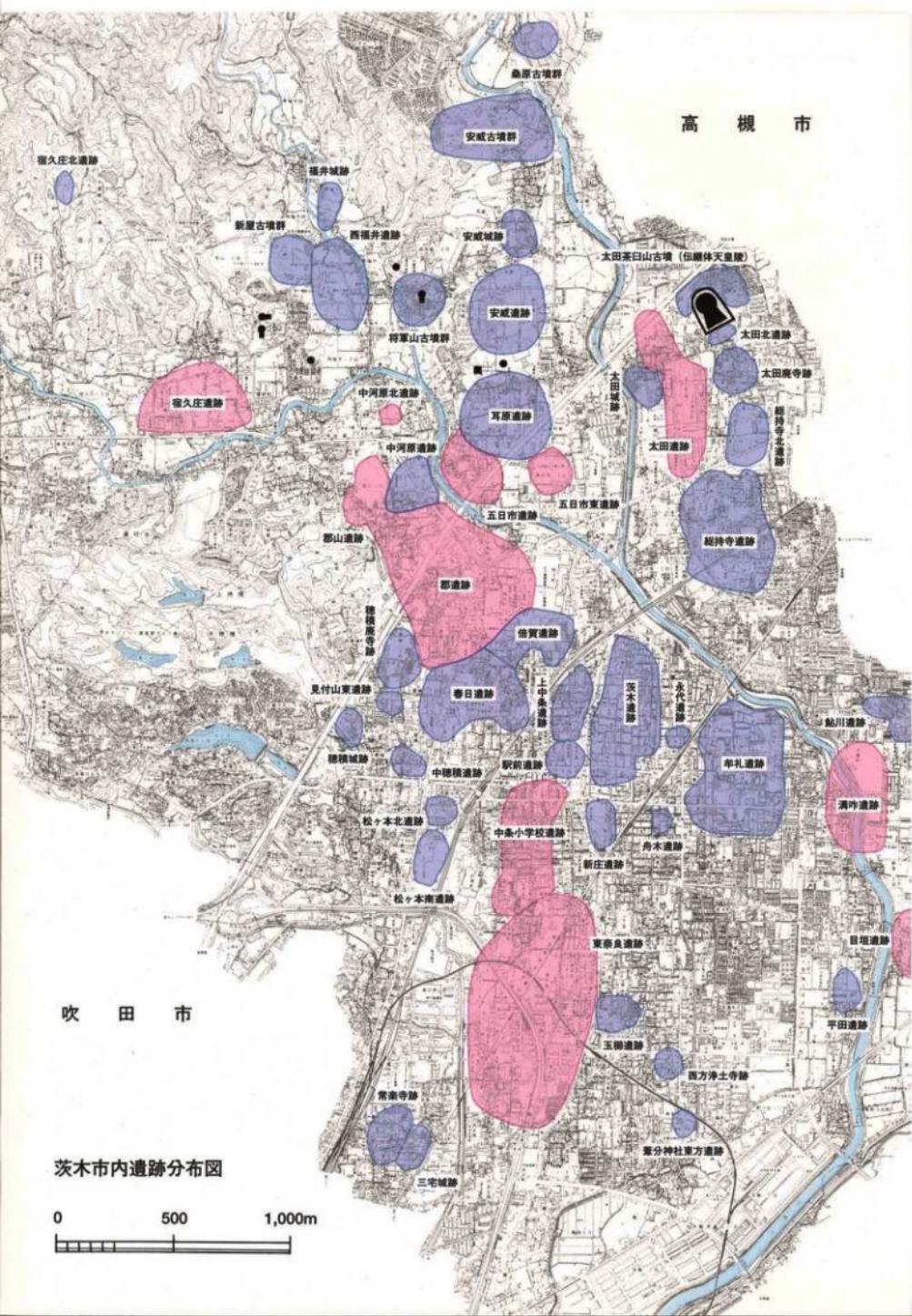
SP：柱穴

SX：落ち込み

図版目次

第1図 中条小学校遺跡 遺構平面図	第17図 卯礼遺跡	遺構面検出状況
第2図 総持寺遺跡	第18図	遺構平面図
第3図	発掘状況	遺構面検出状況
第4図 穂積庵寺跡	遺構検出状況	遺構平面図
第5図	〃	東奈良遺跡
第6図	第1 調査区北部	遺構面検出状況
第7図 安威遺跡	遺構平面図	各遺構検出状況
第8図 東奈良遺跡	第5 遺構面平面図	平面図（第Ⅰ 遺構面）
第9図	第6 〃	〃 (第Ⅱ 〃)
第10図	調査区土層断面図	〃 (第Ⅲ 〃)
第11図	第5面遺構検出状況	春日遺跡
第12図	第6面 〃	遺構平面図
第13図 春日遺跡	遺構平面図	
第14図	遺構検出状況	
第15図	第2 調査区遺構検出状況	
第16図	第1 調査区出土土器実測図	

高槻市



茨木市内遺跡分布図

0 500 1,000m

平成 14 年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	郡遺跡	畠田町 3-31	13.11.5 ~ 14.1.17	467m ²	弥生時代~中世 ピット群 弥生土器 土師器 須恵器 土器棺	コミュニティセンター建設
2	中条小学校遺跡	新中条町 39-4	13.12.17 ~ 14.2.19	1,307m ²	弥生時代 柱穴 土坑 溝 石器 弥生土器 紡錘車	共同住宅建設
3	東奈良遺跡	東奈良三丁目 412-1 他	14.1.22 ~ 14.3.11	315m ²	弥生時代 古墳時代 ピット群 溝 弥生土器 須恵器	共同住宅建設
4	總持寺遺跡	總持寺一丁目 384-1	14.3.25 ~ 14.5.24	521m ²	縄文時代 古墳時代 平安時代 溝 柱穴 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器	共同住宅建設
5	東奈良遺跡	東奈良三丁目 地内	14.1.18 ~ 14.4.30	620m ²	弥生時代 弥生土器	道路敷設
6	總積庵寺跡	上地積三丁目 350-1 他	14.3.7 ~ 14.4.19	536m ²	弥生時代~平安時代	共同住宅建設
7	安威遺跡	十日市町 420-1 他	14.5.10 ~ 14.5.21	182m ²	古墳時代 上坑 柱穴 土師器 須恵器	倉庫建設
8	安威城跡	安威二丁目 2016 他	14.5.20 ~ 14.6.22	384m ²	近世 土坑 柱穴 井戸 土師器 陶磁器	公民館建設
9	中条小学校遺跡	新中条町 91-2	14.4.1 ~ 14.6.4	436m ²	弥生時代 柱穴 溝 井戸 弥生土器	社員寮建設
10	東奈良遺跡	東奈良三丁目 405-2 他	14.4.19 ~ 14.8.2	637m ²	弥生時代~近世 溝 土坑 堀立柱建物跡 石器 弥生土器 上師器 須恵器 陶磁器 金属器 炭化米	老人ホーム建設
11	春日遺跡	春日二丁目 189-1	14.5.24 ~ 14.8.7	1,261m ²	古墳時代~近世 溝 堀立柱建物跡 井戸 上坑 柱穴 土師器 須恵器 陶磁器 石鐵	共同住宅建設
12	车礼遺跡	末広町 913-2	14.6.17 ~ 14.8.9	669m ²	平安時代~中世 溝 柱穴 畦畔 土師器 須恵器 陶磁器	共同住宅建設
13	郡山遺跡	郡五丁目 867	14.9.3 ~ 14.10.3	449m ²	飛鳥時代 奈良時代 建石 建物3間×5間 柱穴 ピット 土坑 土師器 須恵器 建物礫石	共同住宅建設
14	東奈良遺跡	東奈良三丁目 418-1 他	14.6.24 ~ 14.9.5	350m ²	弥生時代 古墳時代 奈良時代 弥生前期 大溝 井戸 焼土坑 ピット 弥生土器 土師器 須恵器	共同住宅建設
15	東奈良遺跡	東奈良三丁目 413-1 他	14.6.27 ~ 14.8.7	234m ²	弥生時代 土坑 柱穴 溝 石器 弥生土器 土師器 須恵器	保育所建設
16	葦分神社東方 遺跡	新和町地内	14.8.12 ~ 14.12.16	1,585m ²	平安時代 中世 柱穴 土坑 井戸	道路敷設
17	東奈良遺跡	天王一丁目地内	14.8.12 ~ 14.9.12	833m ²	弥生時代 古墳時代 柱穴 土坑 溝 弥生土器 上師器	道路敷設
18	春日遺跡	上地積町 132-1	14.9.11 ~ 14.10.2	110m ²	平安時代~近世 溝 柱穴 土師器 須恵器 陶磁器 黑色土器 羽釜片	寺院建設

No. 1, 3, 5, 16, 17 の報告は後日とします。

中条小学校遺跡

所在地 茨木市新中条町 39-4

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成 13 年 12 月 17 日～平成 14 年 2 月 19 日

調査面積 1,307 m²

調査担当 宮脇 煙

調査結果

今回の調査地は、中条小学校遺跡の西南の端に位置している。東南には東奈良遺跡が広がっている。共同住宅建設が工場跡地に計画されたことから、試掘調査を実施し、その結果工場の建物のあったところは基礎等の構造物によって包含層及び遺構が失われており、残っている範囲について調査を行った。

調査地の基本土層は、盛土 75～90cm、耕土 15cm、床土 7～12cm、茶褐色土 10cm、遺構面となっている淡黄色土で、茶褐色土が包含層（弥生土器を含む）である。一部では後世の造成で耕土、床土、及び包含層まで失われていた。

調査地のほぼ中央部と西の一部では遺構面は大きく削り取られており、遺構を検出することはできなかった。

今回の調査で検出された遺構は、溝・土坑・壠立柱建物跡及び足跡である。

溝—I～X II は幅 20～30cm、深さ 5～11cm と小規模であり途切れた状態で検出された。いずれの溝も遺物は出土せず、また、ほぼ南北に継続するように検出しているので、鋤溝と考えられる。

溝—X III は調査区の西で弧を描くように検出された。幅が 25～45cm、深さは 17cm である。溝の一部に弥生時代後期の土器がかたまった状態で出土した。溝—X IV は溝—X III をつくりなおした、途切れた状態で検出された。溝—I V は、溝—X III に切られた状態で検出された。いずれも弥生時代後期の土器がかたまった状態で出土した。

土坑—I は、短径が 1m 46cm、長径が 3m 5cm の楕円形である。検出面から 43cm の位置に段があり、一辺が 47cm の方形の土坑が掘られている。内より弥生時代中期中頃の土器が出土している。また、底近くからサヌカイトの剥片が 1 点出土している。

土坑—I II は、短径が 85cm、長径が 1m 35cm、深さ 52cm の楕円形の土坑である。内より弥生時代中期の土器が出土した。

土坑—I III は、径が 1m 5 cm、深さ 38cm の円形の土坑である。遺物は弥生時代後期の土器片とともに滑石製の紡錘車が出土している。

壠立柱建物跡は調査区の西半部で検出され、2 間 × 4 間を測る。一辺が 65～1m 10cm の方形



の柱跡によって構成されている。深さは、37～43cmであり、円形の径は20～35cmで、いずれの柱跡の埋土から、数点の弥生土器の細片が出土している。そのなかに太いタタキ目のついたものを確認した。

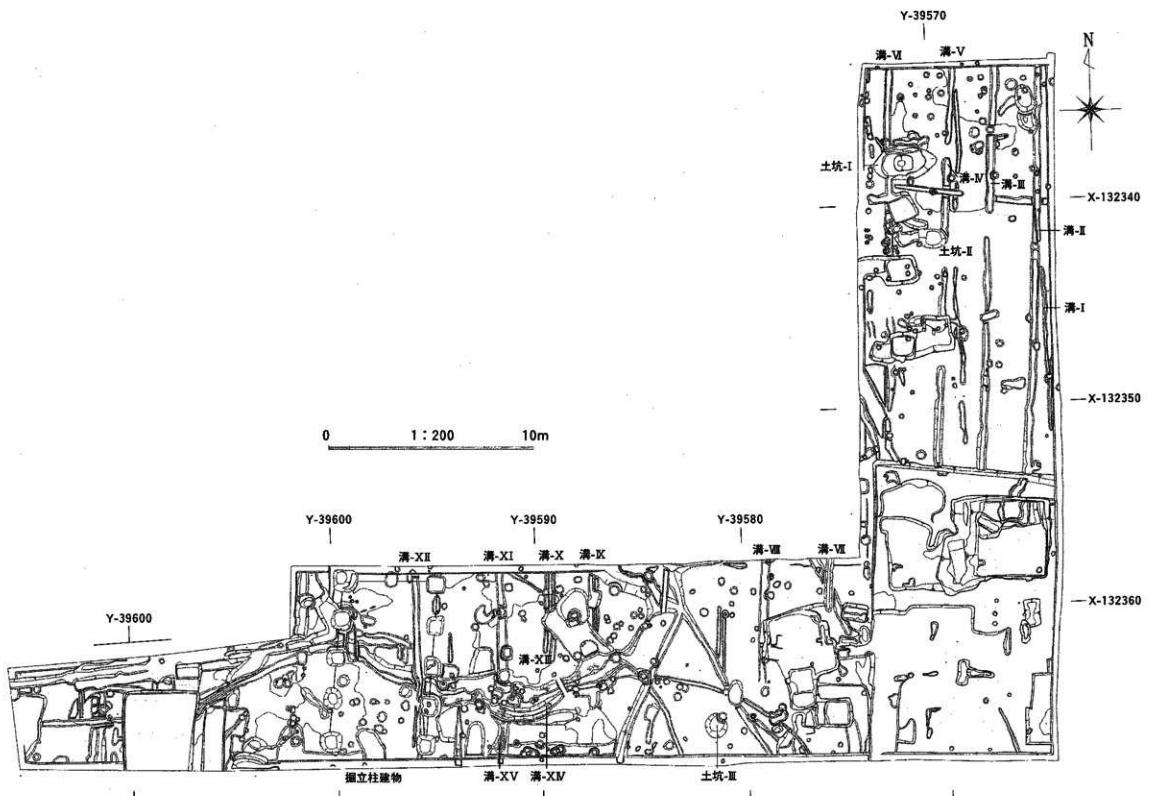
まとめ

今回の調査により検出された遺構で目を引くのは壠立柱建物跡であるが、時期の特定は困難である。包含層から弥生土器及び須恵器が整理箱に2箱出土しているが、須恵器は10数点である。また、遺構の埋土からの須恵器の出土はなかった。そのことにより、弥生時代後期から須恵器の併出しない古墳時代前期の時期が考えられるのではないか。

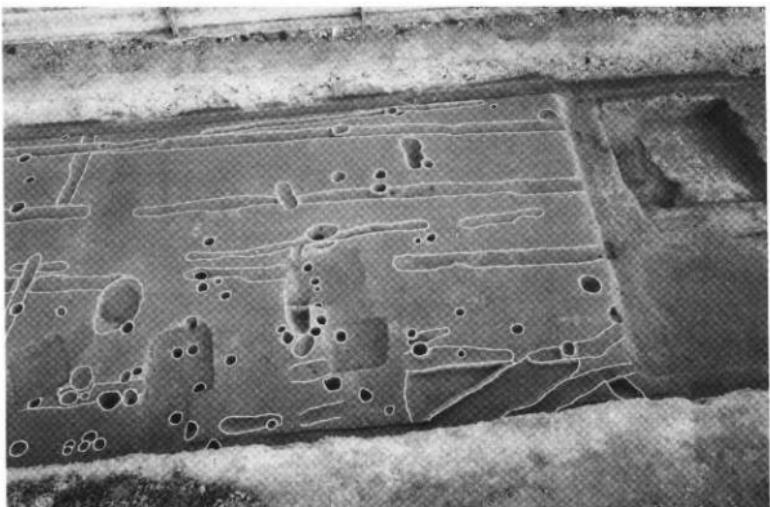
これらのことにより、中条小学校遺跡は、弥生時代後期以後の遺跡と考えられてきたが、弥生時代中期には既に存在していたことを明らかにすることができた。また、中条小学校遺跡に隣接している東奈良遺跡との関係を判別する資料を提供する調査であった。



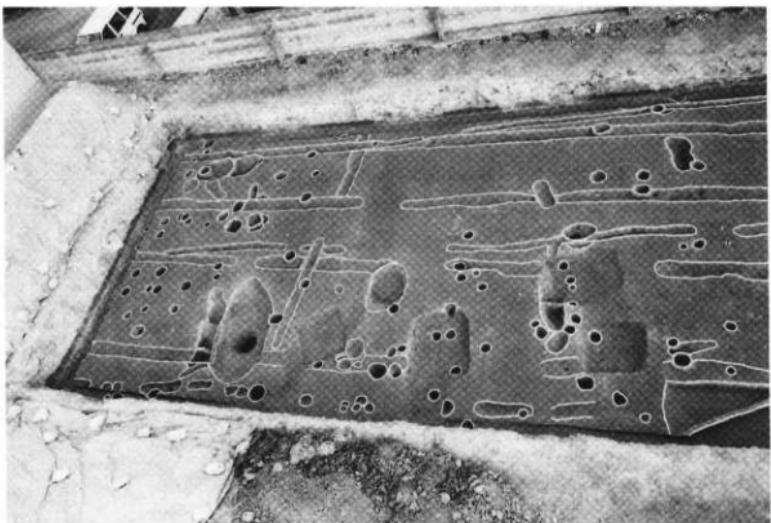
西部（西から）



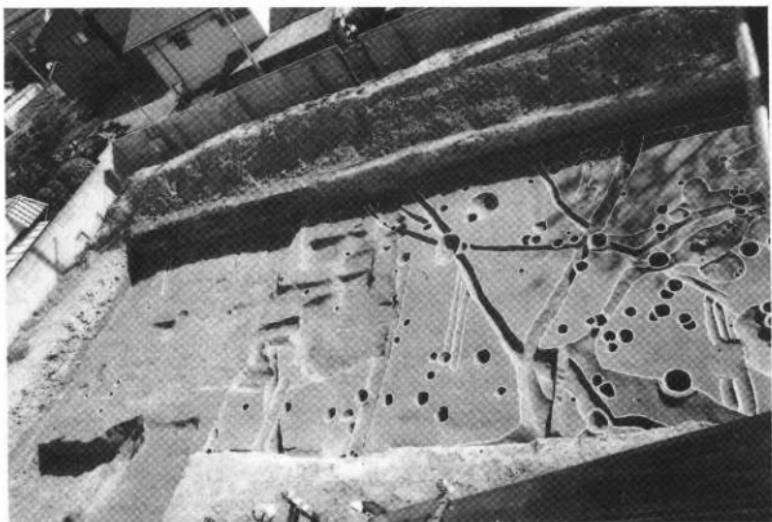
第1図 中条小学校遺跡 平面図



北部（西から）



中央部（西から）



中央部（北から）



土坑-I

総持寺遺跡

所在地 茨木市総持寺一丁目 384-1

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成 14 年 3 月 25 日～平成 14 年 5 月 24 日

調査面積 521 m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は、三島台地の南の先端に位置する西国第 22 番札所総持寺の南の沖積地である。

調査地の基本土層は、耕土(27cm)、床土(15cm)、淡緑黄色土(35cm)、灰色砂(15cm)、褐色土(7 cm)で遺構面は黄灰色土である。灰色砂に須恵器、土師器、瓦器、及び平安～中世の瓦が含まれている。褐色土の上面で精査を行ったが遺構を検出することはできなかった。褐色土には、古墳時代の須恵器、土師器及び弥生土器が含まれている。

今回の調査で検出された遺構は、溝、柱跡及び土坑である。

溝は調査地の北端を横断するかたちで検出された。現最大幅 2 m 80cm、深さ 25cm である。溝内の堆積は上層は褐色土が 5 cm であり、下層は淡灰色の粗い砂が堆積している。下層の淡灰色砂に古墳時代の遺物が含まれている。遺物は少なく細片であり、明確な時期は決められないが古墳時代中期の溝と考えられる。

柱跡は、調査区の西半において検出された。径が 15 ~ 25cm の円形の堀形である。柱跡 I ~ V の埋土から須恵器の細片が出土していることから古墳時代と考えられる。建物として確認することはできなかった。

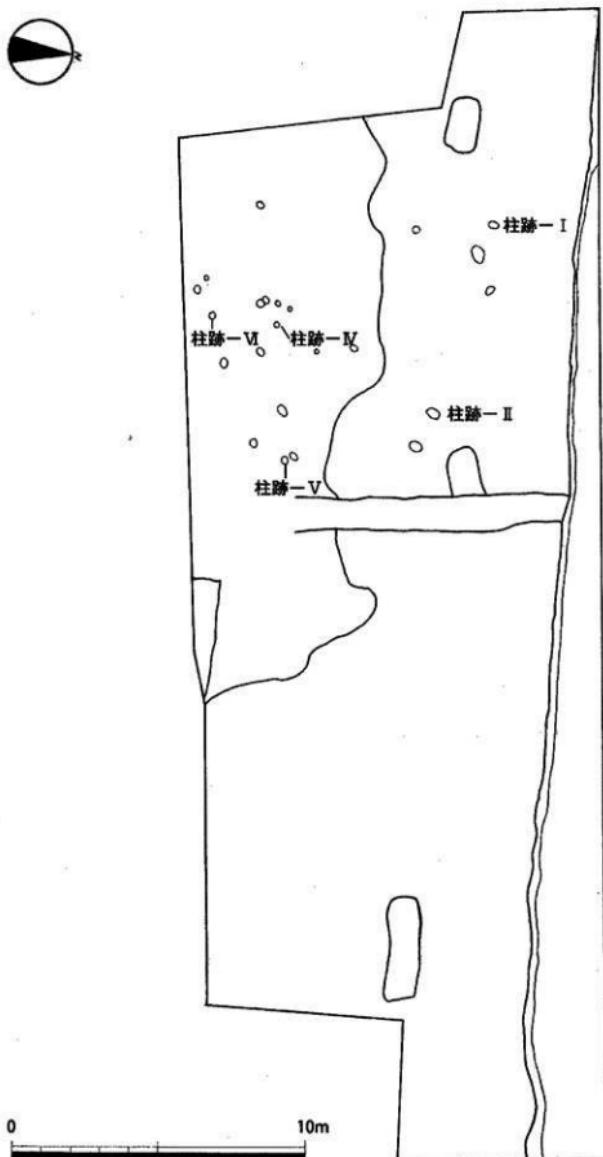
落ち込みが、調査区の西半の南で検出された。一辺が 19 m 以上、深さ 7 cm の不整形の落ち込みである。暗褐色土が堆積しており、弥生土器が出土している。

まとめ

今回の調査により、隣接した総持寺に関係した遺構は検出されなかったが、瓦が出土したことから総持寺の現位置近くに存在していたことが考えられる。

遺構面の上層で調査区の全体を覆っている灰色砂は中世以後の洪水に伴う堆積と考えられ、調査地付近が洪水に見舞われたと考えられる。





第2図 總持寺遺跡 遺構平面図



第3図 総持寺遺跡 発掘状況（東から）

穂積廃寺跡

所在地 茨木市上穂積三丁目 350-1 他

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成 14 年 3 月 7 日～平成 14 年 4 月 19 日

調査面積 536m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

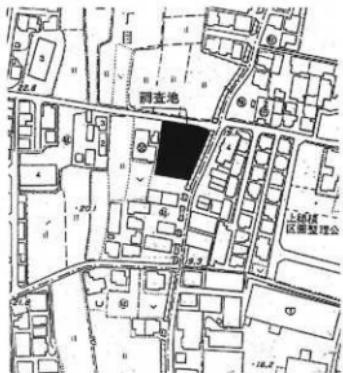
穂積廃寺跡は、7世紀後半から8世紀頃にかけて創建されたとされる寺院関連遺構の遺跡である。当遺跡の包蔵地の範囲としては、上穂積一丁目から四丁目他に位置している。存続期間としては、中世まで続いている。この地域を統率していた有力氏族である穂積氏が創建した寺院と考えられている。文献では、平安時代初期(8世紀後半)に著された『和名類聚抄』(和名抄)に、島下郡には新野(にいや)・宿人(久の誤りか?)・安威・穂積の四郷があったとされ、この時期にはすでに穂積の名称が存在していたことが分かる。これまでの昭和 57 年から平成 4 年までの間に、5か所で調査が行われているが、穂積廃寺と考えられる明確な寺院遺構は検出されていないのが現状である。ただし、寺院があったと考えられる遺物としては、7世紀後半の瓦が数点出土している。また、穂積廃寺が創建されたと考えられる、茨木市内の同じ頃の古代寺院として他に、太田廃寺と三宅廃寺がある。特に太田廃寺からは塔婆心礎及び舍利容器一具、複子葉弁文軒丸瓦や忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。この他には太田廃寺の南方に位置する縦持寺北遺跡から太田廃寺所用瓦と考えられる白鳳時代の摩滅した重弧文軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土している、弥生時代から中世・近世にかけての複合遺跡である。

今回の調査地は、穂積廃寺跡の包蔵地と考えられている遺跡の範囲の南端に位置している。また、当遺跡の周辺には、弥生時代中期から後期、古墳時代から中世にかけての集落跡である郡遺跡、郡三丁目にある郡神社を中心に古墳が点在する郡古墳群の東方に位置している。

本調査は、平成 14 年 3 月 7 日から第 1 調査区南部を前任者の調査員が担当し、また残土処理の部分の確保の為、反転調査の形で同 4 月 2 日より第 1 調査区北部、同 4 月 3 日より第 2 調査区の順で調査した。

調査の区割りとして、共同住宅の建造物が建築される部分の調査区の南側を「第 1 調査区南部」、その北側を「第 1 調査区北部」とし、また、その共同住宅の建造物の西部分にあたるピット式駐車場の設備部分を「第 2 調査区」とした。

基本層序は、第 1 調査区南部及び第 1 調査区北部においては、上層より、盛土層(約 1 m 30cm)、耕土層(約 15cm)、床土層(約 12cm 灰白色砂層)、淡黄灰色砂質土層(約 8 cm、遺物包含層)、黄



色砂質土層（約9cm、遺物包含層）、明黄色粘質土層（約11cm、古墳時代～中世遺構面）、明青灰色粘性シルト層（約16cm 地山層）と明白白色粘性シルト層（約24cm 地山層）及び明青灰色粗砂粘性シルト層（約20cm 地山層）となる。また、第2調査区の基本層序についても、先に挙げた第1調査区南部及び第1調査区北部にほぼ準ずる。

調査の結果、第1調査区南部においては、遺構としては溝が12条、柱穴が87口、土坑8基を検出している。そのうちSK-01からは、6世紀前半頃の坏蓋が出土しており、若干欠けてはいるものの、ほぼ完形に近い状態である。^(P18) また、同調査区の北東にあたる遺構面上包含層からは黒色土器が出土している。

第1調査区北部においては、溝が5条（そのうち第1調査区南部の続きの溝1条を含む）、柱穴が83口、土坑1基を検出している。そのなかでも、特筆すべき点は、SP-25から出土した平瓦である。^(P18) 今回の調査で唯一出土した、寺院遺構関連のものと考えられる瓦の遺物である。この7世紀後半頃のものと考えられる平瓦が出土したことによって、この地域周辺には寺院に関連する何らかの造営物があったことが考えられる。

また、北部においては、柱穴53口のうち、建物が建つ可能性が考えられるものが2棟、柵列と考えられる柱穴列が1列存在する。

第2調査区においては、溝2条、柱穴32口、土坑10基を検出している。そのなかでも、特筆すべき点は、SP-04から内面が黒色処理された土師器の皿が出土している。また、調査区の北東端の一角においては、多数の足跡を検出した。

まとめ

これまで穗積廃寺跡の包蔵地内の発掘調査は、5か所ほどと少なかったうえに、寺院が存在したという明確な遺構や新たな知見は今回の調査においては得られなかった。しかし、第1調査区北部の南西寄りの建物の付近から、7世紀後半頃のものと考えられる平瓦が出土したことは、寺院に関連する何らかの建物が建っていたことが考えられる。今後の周辺での発掘調査に期待したい。

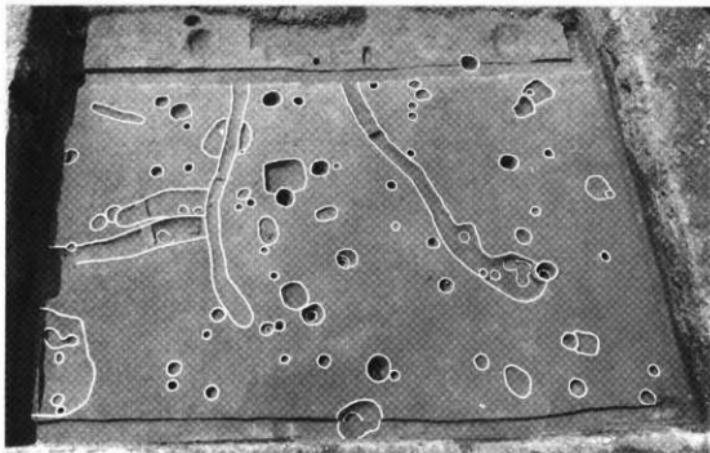
参考文献

茨木市役所編 「茨木市史」 昭和44年6月20日

茨木市教育委員会編 「平成8年度発掘調査概報」 平成9年3月31日



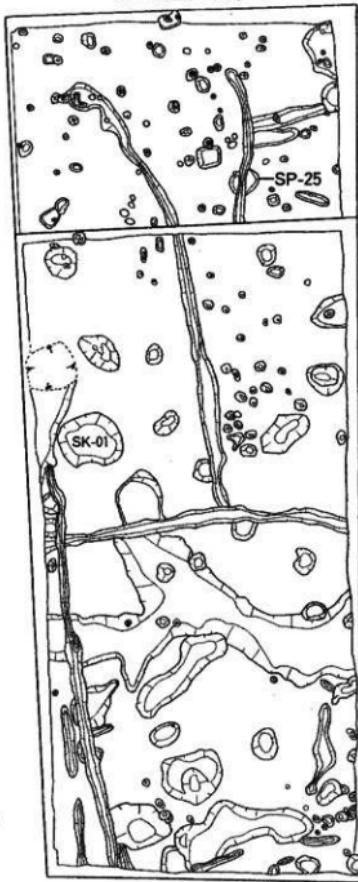
第1調査区南部 遺構完掘状況（北から）



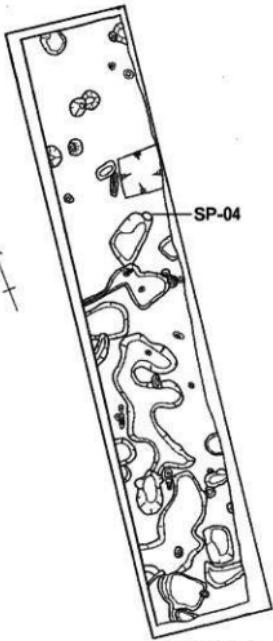
第1調査区北部 遺構完掘状況（北から）

第4図 穂積廃寺跡 遺構検出状況

第1調査区北部



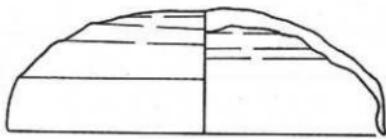
第2調査区



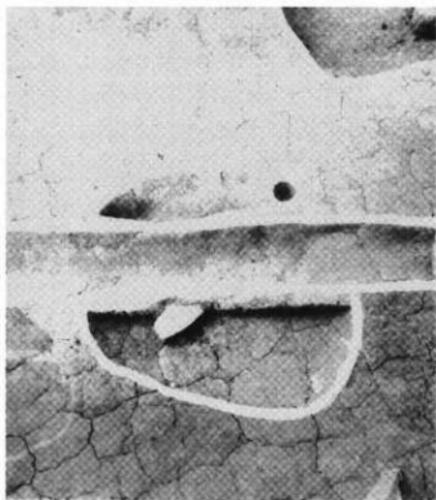
第1調査区南部



第5図 穂積廃寺跡 第2調査区
造構検出状況（北から）



SK-01 出土杯蓋実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



SP-25 平瓦出土状況



SP-25 平瓦出土状況
第6図 穂積廃寺跡 第1調査区北部

安威遺跡

所在地 茨木市十日市町420-1他

調査原因 倉庫建替工事

調査期間 平成14年5月10日～平成14年5月21日

調査面積 182m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

今回の調査地の北西には、府道茨木龜岡線の西側を境として安威遺跡が広がっている。この府道の拡幅工事に伴って平成9年～平成11年に大阪府教育委員会によって調査が実施され、古墳時代中期～後期の集落跡が確認されている。この調査地の倉庫建設予定地はこの府道に隣接していて、試掘調査を実施したところ、既設の建物のない区域においては、盛土（約1.2m）、耕土（0.25m）、床土（0.15m）の下層に小片であるが古墳時代の土師器及び須恵器を含む茶褐色土（0.1m）の包含層が確認された。その下層には明黄色土が堆積している。

今回の調査は倉庫建設予定地が既設の建物によって遺構面が削りとられていることから、既設の建物部分を除外して調査を実施した。

検出された遺構は、柱穴、土坑及び落ち込みである。

柱穴は、円形の径が15～25cmと30～40cmのものが検出されたが、堀立柱建物跡として捉えることはできなかった。

土坑-Iは、短辺が75cm、長辺が1m35cm、深さ27cmの隅丸の方形の土坑である。土坑-IIは、短辺が80cm、長辺が1m20cm、深さ32cmの隅丸の方形の土坑である。土坑-IIIは、短辺が1m5cm、長辺が90cm以上、深さ35cmの隅丸の方形の土坑である。

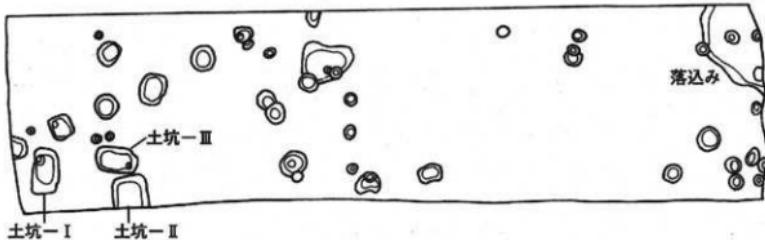
落ち込みは、調査区の北東で検出された。径が1m90cm以上、深さ7cmの円形の落ち込みである。

包含層及び各遺構から須恵器・土師器が出土していることから、柱穴・土坑、落ち込みは古墳時代のものと考えられる。

まとめ

調査前まで、府道茨木龜岡線の西側までと考えられていた安威遺跡の範囲が、東側まで広がることが確認された。





第7図 安威遺跡 遺構平面図



調査中央東（西から）



調査西区（東から）

安威城跡

所在地 茨木市安威二丁目 2016 他

調査原因 公民館建設工事

調査期間 平成 14 年 5 月 20 日～平成 14 年 6 月 22 日

調査面積 384 m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は、安威川が山地部より平野部への出口の右岸の河岸段丘に位置している。安威城の居館の推定されている地に隣接していることから試掘調査を実施した結果、近世の陶磁器片を含む包含層が検出されたので調査を行った。調査前は、畠地で西が竹林であった。層位は、上から耕土（30cm）、包含層の黒色土一灰、焼土含む一（35～55cm）、遺構面の黄色土（礫を含む）である。包含層からは大半は近世の陶磁器の他、少數の須恵器が出土された。

検出された遺構は、柱跡、井戸、土坑である。

柱跡は、径が 20cm 前後、25～30cm の円形の柱跡である。柱跡内より出土したのは近世の陶磁器及び土師器であり時期差がないと考えられる。建物として確認することはできなかった。

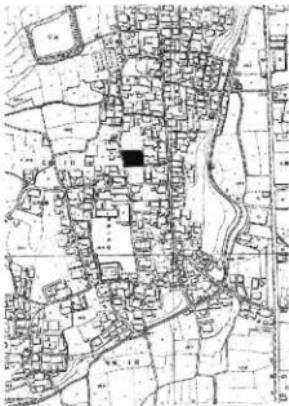
井戸は 2 基検出された。調査区のほぼ中央で検出された井戸 I は、短径が 2 m 20cm、長径が 2 m 60cm の楕円形で、深さが 1 m 10cm である。人頭大の河原石で積まれている。底には何の施設もなかった。井戸内は、包含層と同じ黒色土一灰、焼土含む一によって埋められており、上位においては瓦が投げ込まれた状態で埋められていた。井戸内より、近世陶磁器、瓦が出土した。井戸 II は、径が 1 m 25cm の円形であり、深さ 55cm である。近世の瓦によって埋められていた。素堀であったと考えられる。

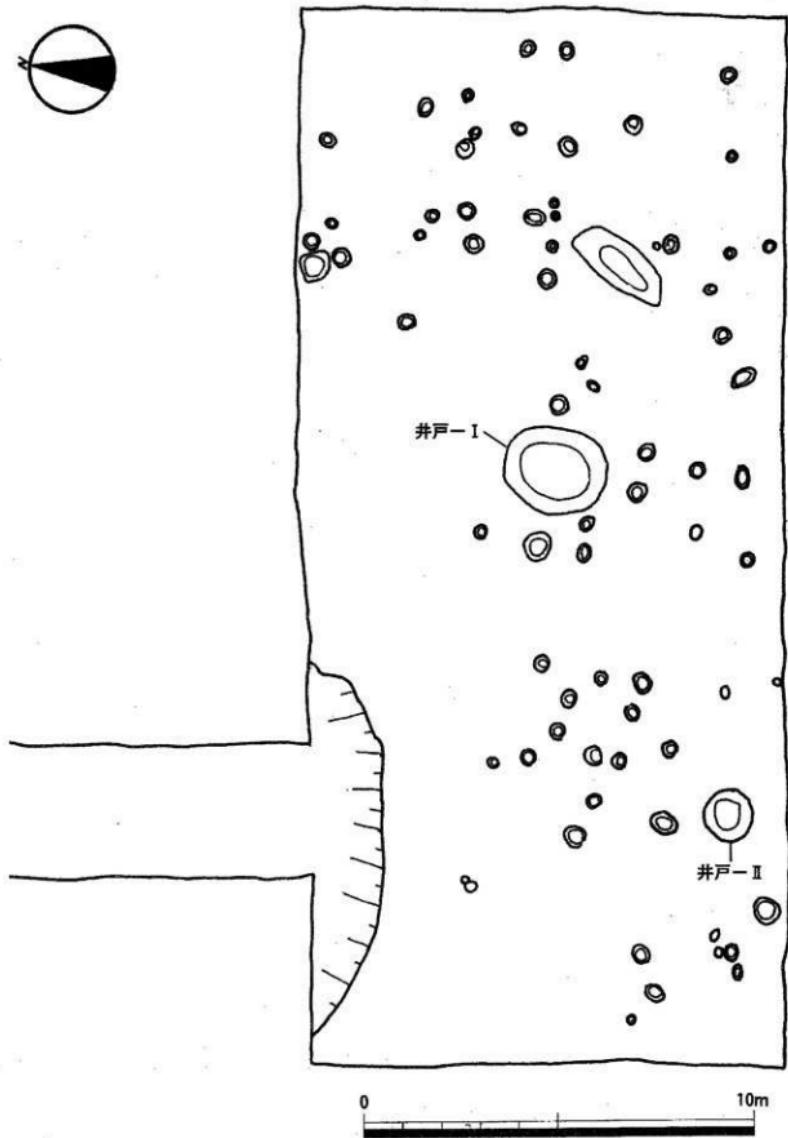
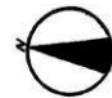
土坑は、調査区の北半で検出された。短辺が 1 m 15cm、長辺が 2 m 70cm、深さ 35cm の不整形で楕円形をした舟底の土坑である。出土遺物はなかった。

遺構面は調査区の南西部においては、西に緩やかに下がっていく。

まとめ

今回の調査によって、安威城の関係の遺物及び遺構は検出されなかった。調査によって近世の時期の集落の一端が確認された。このことから近世の時期における安威村の一端が明らかになり、現在は畠になっているが近世にはなんらかの家の存在していたことがわかった。





安威城跡 遺構平面図

中条小学校遺跡

所在地 茨木市新中条町91-2

調査原因 社員寮建替工事

調査期間 平成14年4月1日～平成14年6月4日

調査面積 436m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は、中条小学校遺跡の北東の端に位置しており、中条小学校に隣接している。約150m北方には駅前遺跡が広がっている。既存の社員寮の建物の建て替え工事で、包含層及び遺構が既に削り取られていることも予想されたが、試掘調査を実施したところ、既設の建物のない区域から包含層が確認された。遺構面が残っている範囲によって調査を行った。

調査地の基本土層は、盛土65cm、耕土23cm、淡黄色土（床土）7cm、淡黄緑色土15cm、茶褐色土（包含層）15cm、黄色粘土（遺構検出面）となっている。包含層内には弥生土器（後期）、須恵器及び土師器が含まれている。

検出された遺構は、柱跡・溝・井戸・土坑である。

柱跡は、径が12～25cmの円形のものである。柱跡内からの出土遺物は、いづれも弥生土器、須恵器及び須恵器の細片であり、弥生時代後期以後と考えられるが明確には捉えられない。

溝-Iは調査区の東寄りで幅72cm、深さ12cmの規模で弧を描くように検出された。溝内より弥生土器（後期）が検出した。

溝-IIは調査区の北西から南東に横断した状態で検出された。幅は90cm、深さは16cmである。溝内から弥生土器（後期）が出土した。溝-I・IIはともに後世に削られていると考えられる。

井戸は調査区の西端で検出された。径が1.75mの円形の素堀井戸であり、深さは1.15mである。井戸の中程から弥生時代後期の土器（瓶）が2点出土した。

土坑-Iは、短辺が75cm、長辺が1m35cm、深さ27cmの隅丸の方形の土坑である。土坑-IIは、短辺が80cm、長辺が1m20cm、深さ32cmの隅丸の方形の土坑である。土坑-IIIは、短辺が1m5cm、長辺が90cm以上、深さ35cmの隅丸の方形の土坑である。遺物はいづれも出土しなかった。

まとめ

今回の調査により、後世に削り取られて遺構の検出状態は良くなかったが中条小学校遺跡がさらに北においても広がっていると考えられる。検出された遺構で時期が明らかなのは、弥生時代後期であり、中条小学校遺跡の弥生時代後期前後の時期が不明である。また、調査地域の中条小学校遺跡のなかでの位置関係も明らかでない。このことが今後の調査の課題であろう。





調査区南（北から）



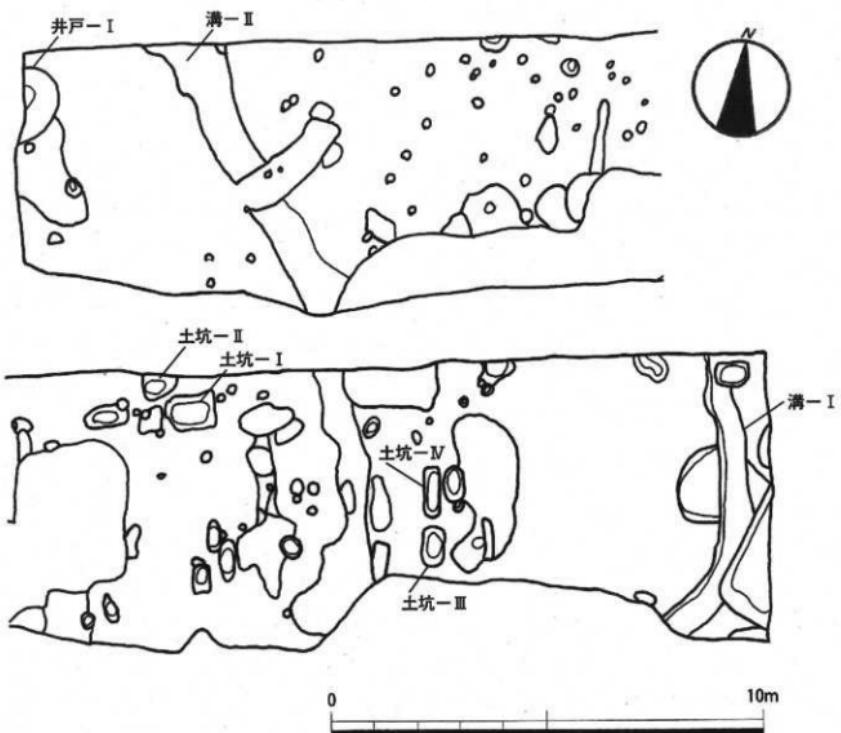
調査区北（南から）



井戸 I



調査区中央（東から）



中条小学校遺跡 遺構平面図



遺構（西南から）

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目405-2他

調査原因 有料老人ホーム建設工事

調査期間 平成14年4月19日～平成14年8月2日

調査面積 637m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果

東奈良遺跡は茨木市南部の標高6～7mの沖積平野上に位置し、南北約1.2km、東西1kmの遺跡範囲にて周知されている。近年、平成11年度の東奈良区画整理事業に伴う区画道路部分の発掘調査が実施されてから、この区画内の用地部分の調査が増加しつつある。今回の調査も区画内に老人ホームを建設するため、事前に発掘調査を実施したものである。



東奈良遺跡は前期洪積層である大阪層群で形成された千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地状の平坦面と遺跡の東端を北から南へ流れる元茨木川が形成した沖積面に立地している。遺跡北西部の遺構検出面の標高は平均7m前後で、地形的に北西から南東方向に向かって緩やかな傾きを持っており、遺跡南東部では5m前後まで標高が下がる。

今回の調査では基本的に中世面を主体とする面、弥生時代前期後半から古墳時代前期を主体とする面及び弥生時代前期を主体とする地山面の3面で遺構検出および精査を行った。調査は東と西に調査区を分割して反転調査として実施している。

検出遺構

今回検出された主な遺構は以下のとおりである。中世面においては調査区東南端において東西方向の溝および条里制に伴うと思われる鋤溝を多数検出した。これらの耕作溝はやや東にふれるが、ほぼ東西南北を基調とした条里制区画を意識した開墾意識が窺える。次に弥生時代前期後半～古墳時代前期を主体とした面では、溝・土坑・井戸・堀立柱建物群を構成する多数の柱穴が検出されている。井戸2基、土坑約70基、溝約60条、柱穴約2,000口を精査している。最後に弥生時代前期を主体とする地山面でも環濠・溝・土坑・柱穴を主体とした遺構群が検出された。環濠1条、溝約30条、土坑約50基、柱穴約600口を精査している。

基本層序

調査区の基本層序はⅠ層からⅢ層まで大別される。Ⅰ層が表上で0.8から1.3mの現代の盛土及び耕作土である。

Ⅱ層は褐灰色シルトで層厚0.1mを測り、近代の耕作土層である。

Ⅲ層は近世の水田層を主体としたにぶい黄橙色シルトを含む灰黄褐色シルト層で層厚0.1m前後の層

が2～3枚検出されている。

IV層は中世の暗赤褐色シルト質埴土を含む褐灰色シルトで、層厚は約0.1mを測り、このIV層上面で中世(第4面)の遺構検出を行っている。

V層は古墳時代～古代の遺物包含層と思われ、褐灰色シルトを含む黒褐色粘土層で層厚は0.1～0.3mである。

VI層は古墳時代の包含層と思われ、このVI層上面から古墳時代前期初頭(庄内式併行期)の甕を出土するSK(土坑)16が掘り込まれている。VII層は灰黄褐色土を含む黒色土で層厚0.1～0.25mを測る。

VIII層は弥生時代中期～後期の遺物包含層と思われ、灰黄褐色土を含む黒褐色土で層厚0.2～0.4mを測る。

IX層は灰色粘土をブロック状に含む黄橙色粘土で弥生時代前期後半～中期初頭頃の整地層と思われる。この整地層は一見地山面にみて取れる程明るい土壤をしており、VII層上面にて(第5面)遺構検出および精査を行っている。層厚は0.1～0.2mを測る。

X層は弥生時代前期後半の遺物包含層と思われ、黒褐色土や褐灰色粘土を含む黄褐色シルト質埴土で層厚は0.1～0.15mを測る。

XI層はにぶい黄褐色シルトや黄橙色粘土を主体とし黒褐色粘土ブロックを含むことから、弥生時代前期の整地層と思われる。層厚は0.2～0.3mである。非常に堅く縮まっており、層も均一で面的な広がりを持つことなどを考え併せると、IX層と同様、整地層と考えられる。

XII層は灰白色粘土の地山になる。このXII層上面で弥生時代前期を主体とする遺構群の検出(第6面)および精査を行っている。

出土遺物

今回の調査において出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して約280箱に及び、その種類と内訳は蓋・壺・甕・鉢・高环・器台・水差し・ミニチュアなどの弥生土器や古墳時代の甕等の土師器や須恵器、石鎌や石剣・石包丁・磨製石斧・砥石などの石器類、管玉などの玉類、獸骨を中心とした骨類、種や炭化米等の植物遺存体、柱材や心礎に転用した板材等の木製品がある。これらの中で特筆すべきものは第5面の長楕円形の土坑(SK447)から一面に炭化米が大量に出土したことや、また、木製品の中には弥生時代前期後半～中期初頭の土坑(SK516)より木製の蓋製品がほぼ完全な形で出土したことなどが挙げられる。

これら出土遺物の内訳は弥生土器が約263箱、石器類が3箱、木製品が2箱、土壤サンプルや炭化米・種が1箱、骨類が1箱、鉄器類1箱、古墳時代の土師器・須恵器が5箱、古代の土器が1箱、中世の土師皿や黒色土器碗、陶磁器類が2箱、近世の陶磁器が1箱である。

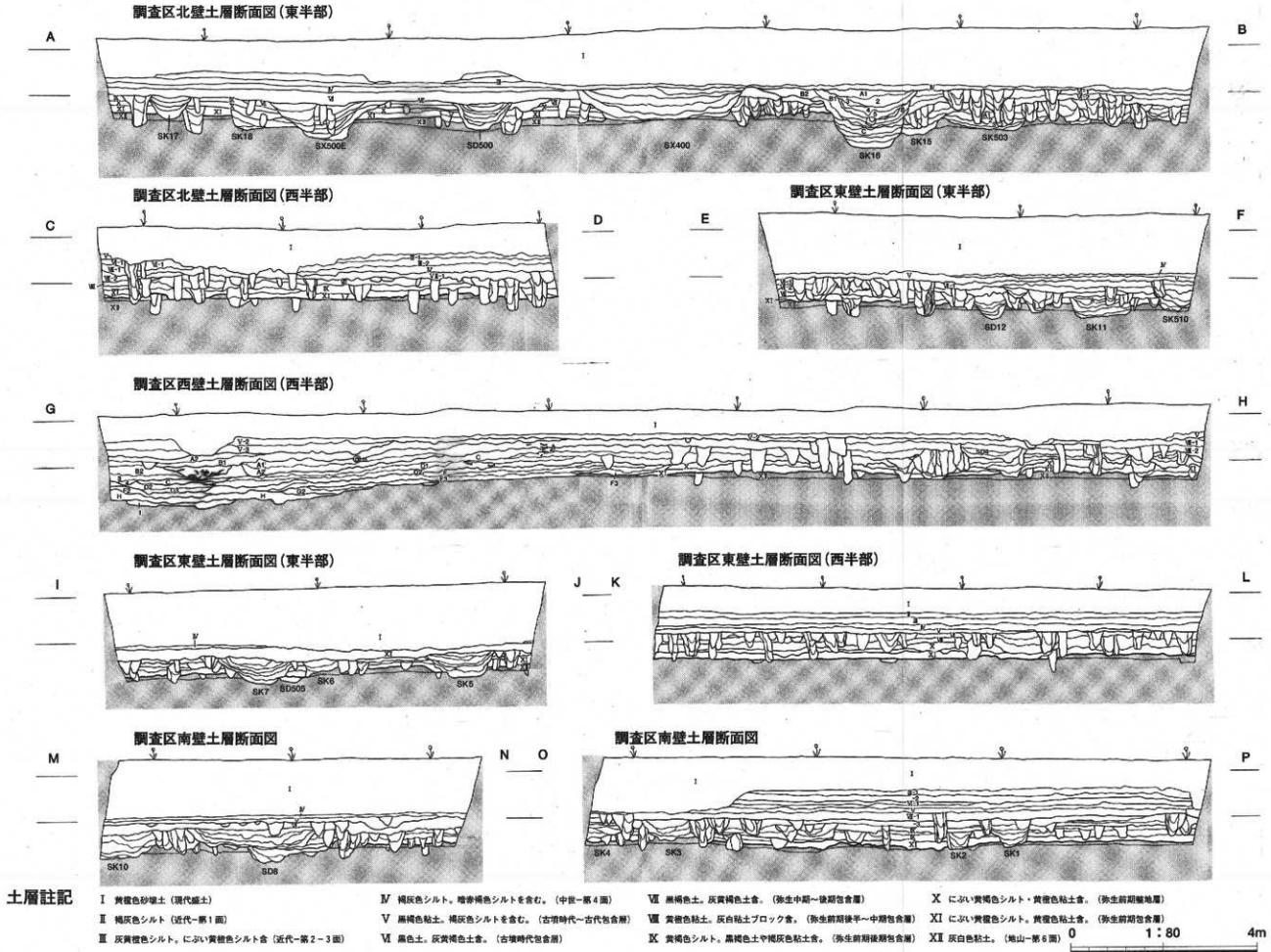
これら多量の遺物のうち、実測可能なものは数百点を数えるが、今回の概報においては弥生時代前期～中期の遺構の出土土器を中心に、石包丁や磨製石斧、石鎌などの石器類を載せることとした。以下出土遺物の詳細を記す。



第8図 東奈良遺跡 第5構面平面図



第9図 東奈良遺跡 第6遺構面平面図



第10図 東奈良遺跡 調査区土層断面図

1～4はSK(土坑)501出土の弥生時代前期中葉頃の土器である。

1は壺類の蓋で、裾部が大きく八の字に開き器高9.2cm、口径推定25.6cm、天井部径8.0cmを測る。胎土は砂粒が多く含み、焼成はやや不良である。器面調整は内外面共にハケ目を施す。2・3は広口壺である。

2は口縁部が大きく外反し、体部中央が大きく膨らむ。頸部と肩部に段が巡り、肩部段の下端に3本のヘラ描きの円弧文が施される。器高は27.8cm、口径推定19.0cm、底径8.4cm、最大径30.9cmを測る。胎土はやや砂粒を含むものの緻密で焼成は良好である。体部に一部朱彩が見られる。器面調整は内外面共に丁寧なヘラミガキを施している。

3は小型であるが、2と同様最大径が体部中央にある。頸部と肩部には数条のヘラ描沈線文が巡る。器高は20.0cm、口径12.7cm、底径7.9cm、最大径18.8cmを測る。胎土は砂粒が多く含むが焼成はやや良好である。器面調整は口縁部外面がナデ、内面がヘラナデ、体部外面が縦方向のヘラミガキの後、横方向のヘラミガキで内面もヘラミガキを施し丁寧に仕上げている。

4はミニチュアの粗製鉢である。器高は4.4cm、口径8.2cm、底径6.1cmを測る。胎土は砂粒が多く含むが焼成は良好である。器面調整は外面がハケ目、内面がナデで口唇部を指で押さえている。

5～9はSD(溝)451出土の弥生時代前期中葉～中期前葉にかけての土器である。5・6は器高の低い笠形の壺蓋である。

5はつまみの中央部分に貫通孔がみられる。器高3.1cm、口径11.0cm、つまみ径3.9cmを測る。内外面共にヘラミガキを施している。

6は器高6.9cm、口径17.6cm、つまみ径5.3～5.7cmを測る。内外面共にヘラミガキを施し、外面下半はナデで仕上げている。

7は短頸壺で口縁部は短く外反し、体部最大径がやや下半で屈曲しており、一見、中期後葉段階(IV様式)の水差しの体部に類似する。器高は16.2cm、口径10.8～11.3cm、底径6.3cm、最大径14.6cmを測る。器面調整は外面がハケ目調整の後にヘラミガキを施し、内面がハケ目で、口縁端部のみヘラミガキが見られる。

8は口縁部が外反する鉢で端部を丸く仕上げるタイプのものである。器高は10.6～11.7cm、口径13.6cm、底径5.7cmを測る。外面はハケ目後にヘラミガキを施し、内面はナデおよび口縁部に横方向のヘラミガキを施している。

9は甕である。口縁部が大きく屈曲し口唇部に一定の間隔で刻目を施し、口縁直下と体部上半に3条のヘラ描直線文とその間に平行斜線文を施している。残存高は18.2cm、推定口径は38.3cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部は縦方向のヘラナデ、内面もヘラナデを施す。

10～13はSD453出土の土器である。

10は双頭状のつまみを持ち貫通孔を有する蓋である。器高は3.3cm、推定口径13.6cmを測る。外面はヘラミガキ、内面はハケ目を施している。

11は大きくラッパ状に開く広口壺の口縁部である。口唇部にはヘラ描による沈線が巡り、口縁上半には均等に2対4箇所の貫通孔が推定8箇所空けられており、口唇部及び口縁部内面には丹塗りの痕跡が

認められる。また、口縁部内面には粘土紐の貼り付けによる渦巻き状の突帯が付される。残存高は8.6cm、推定口径は32.8cmを測る。調整は外面が縦方向のヘラミガキにヨコナデ、内面にハケ目痕跡がわずかに見られ、胎土は緻密で非常に丁寧なつくりをしている。

12・13はミニチュア土器である。12は粗製の壺で器高5.2～5.7cm、口径4.0～4.4cm、底径3.5～4.5cm、最大径が5.5cmを測る。

13は高环と思われるが、受部が欠損している。残存高7.2cmを測り、脚部は中実で短く開き、縦方向のヘラミガキを施している。

14はSD(溝)500出土の前期(I様式)の鉢である。口縁部が強く外反し、文様は見られない。器高は14.6cm、推定口径26.0cm、底径7.6cmを測る。内外面共にヘラミガキを施している。

15はSK(土坑)528出土の中期中葉(IV様式-1)の半環状把手を有する完形の水差しである。口縁部は直口氣味で体部下半が屈曲して算盤玉を呈する。器高19.3cm、口径8.3～9.0cm、底径6.0cm、最大径16.5cmを測る。外面は口縁端部がヨコナデ、口縁部及び体部上半が縦方向のヘラミガキ、下半が横方向のヘラミガキ、下端がヘラナデである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキと思われる。体部外面下半及び内面には多量の煤が付着している。

16はSK(土坑)508出土の鉢と思われるが、その形態から蓋とも考えられるものである。ここでは、口縁部がやや内湾し調整が内外面にヘラミガキを施し丁寧に作られていることから鉢と考えている。器高9.9cm、推定口径12.0cm、底径4.5cmを測り、体部はお椀状で、底部は上げ底状を呈している。

17はSK(土坑)516出土の笠形を呈する壺蓋と思われるが、その形態から鉢とも考えられるものであるが、外面調整がヘラミガキによる丁寧な仕上げを行っており、噴きこぼれと思われる煤が外面全面に付着していることから蓋として使用されたものと考えられる。器高6.1～6.5cm、推定口径10.6cm、つまみ径4.4cmを測り、胎土は緻密である。

18はSK(土坑)526出土(III～IV様式)のミニチュア土器である。コップ状で底面から直線的に口縁部に至る。器高は4.9～5.3cm、口径4.3cm、底径4.0～4.3cmを測る。

19はSK516出土の前期後半～中期初頭頃の木製の壺蓋である。約2/3が欠損するが、器高2.0cm、推定直径16.8～17.0cm、つまみ径5.2cmを測る。乾燥による歪みが見られ、全体をロクロ整形後、裏面凹み部を削り込んで加工している。つまみ直下には3条の沈線を巡らしているが、それ以外に装飾は見受けられない。

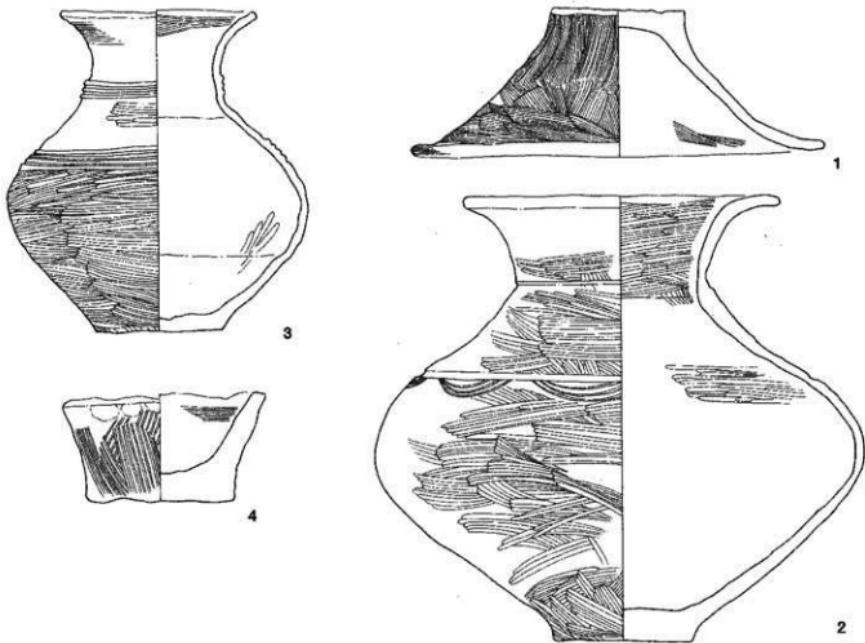
20～26はそれぞれミニチュア土器である。

20はSE(井戸)400から出土しており、口縁部が大きく開く壺である。器高9.0cm、口径9.0cm、底径4.0cmを測る。外面はヨコナデ、ハケ目を施し、口縁内面はヨコナデを施す。

21はSK425出土で上半部が欠損しており、台付き小型鉢を模しているものと思われる。台部と体部は大きく貫通している。残存高3.4cm、底径6.2cm、孔径2.2cmを測る。内外面共に丁寧なヘラミガキを施す。

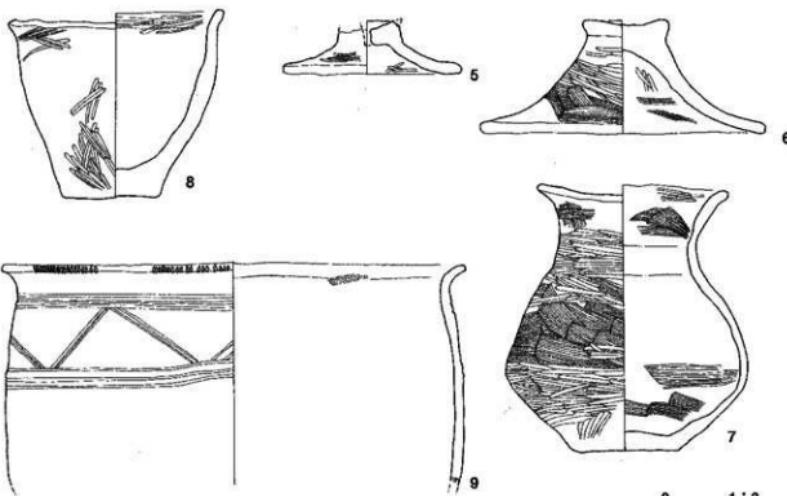
22・23・25はSD(溝)400出土で、22は上半部を欠損するものの壺形を呈するものと思われる。残存高3.6cm、底径3.1cmを測り、外面はハケ目を施す。

24はSX407出土の鉢形のミニチュアである。器高3.1cm、口径5.2cm、底径4.1cmを測る。およそ前期

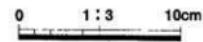


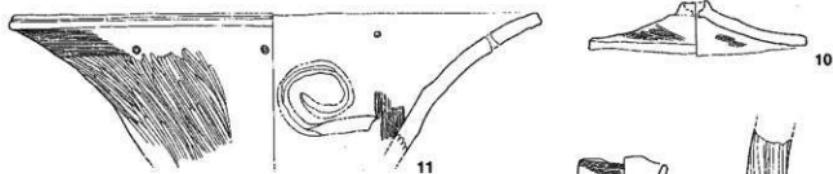
上 : SK501 出土土器

下 : SD451 出土土器

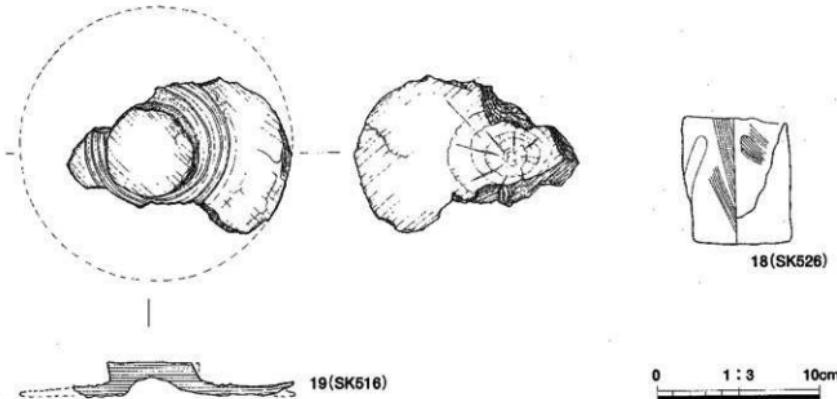
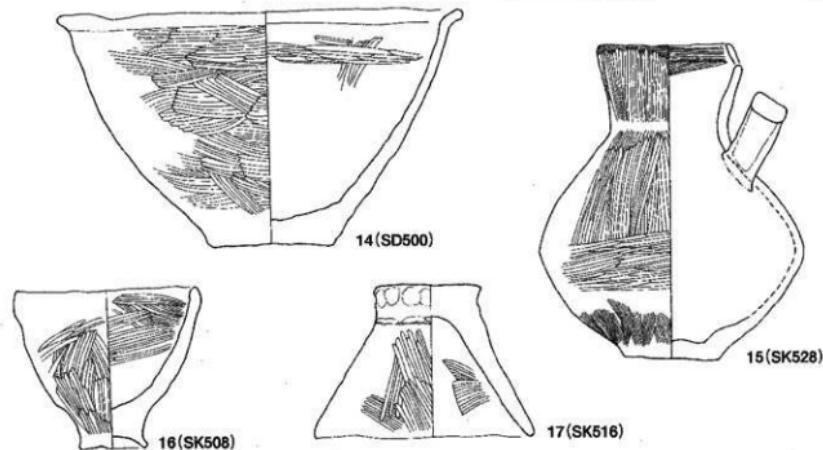


東奈良遺跡 出土遺物 (1)

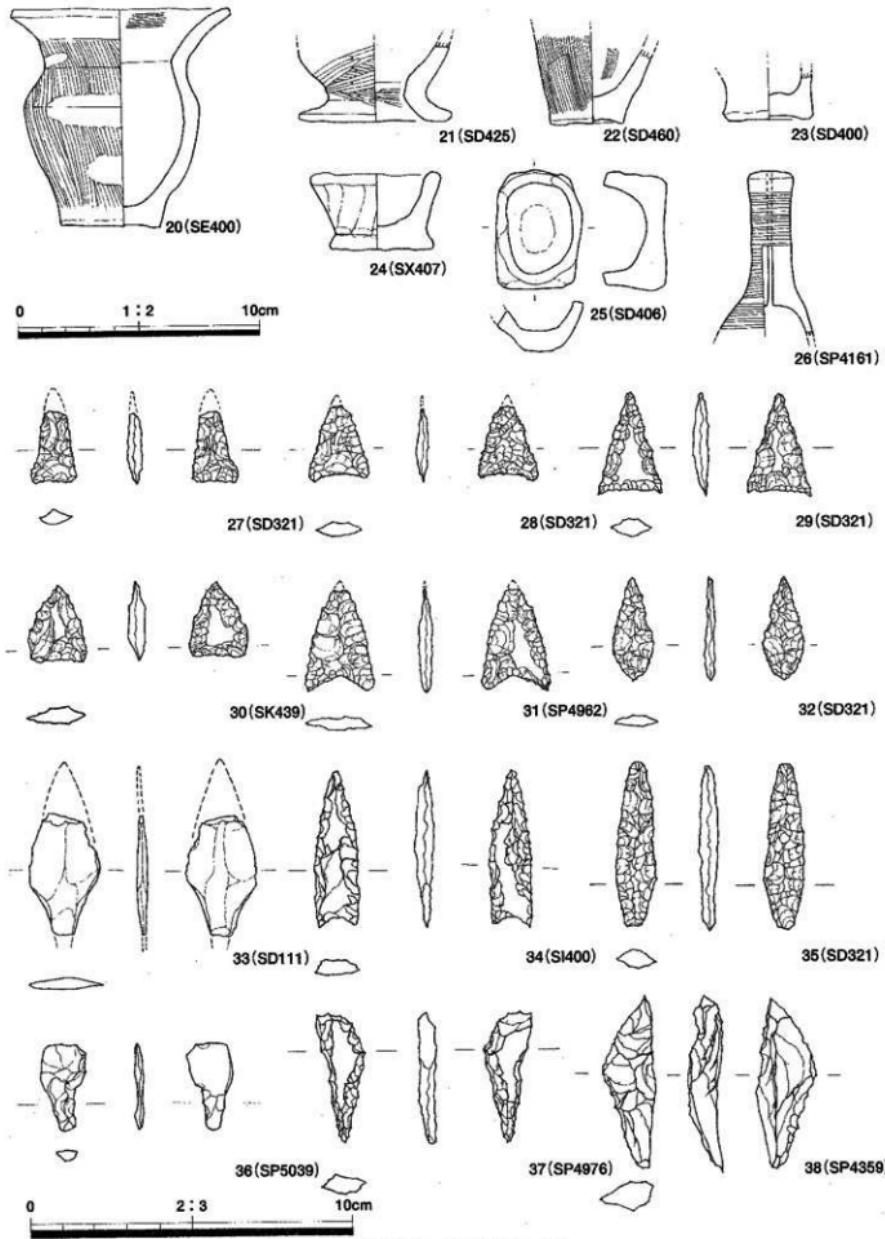




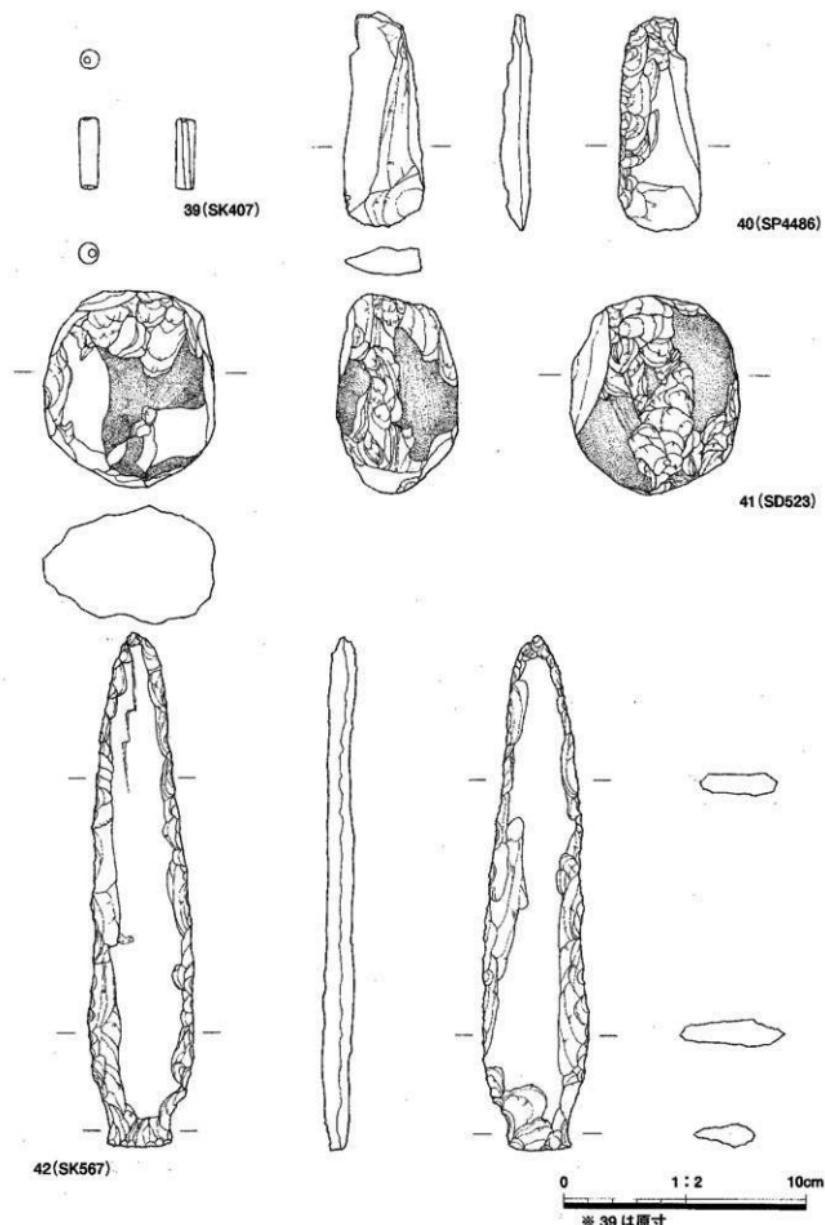
SD453 出土土器



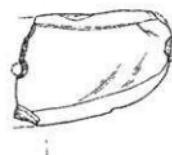
東奈良遺跡 出土遺物 (2)



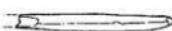
東奈良遺跡 出土遺物 (3)



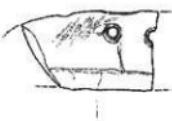
東奈良遺跡 出土遺物 (4)



43(SX400)



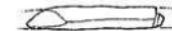
1



1



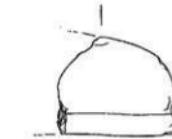
44(SD302)



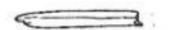
1



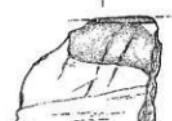
1



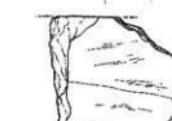
45(SD451)



1



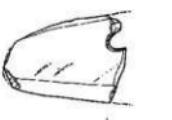
1



46(SD451)



1



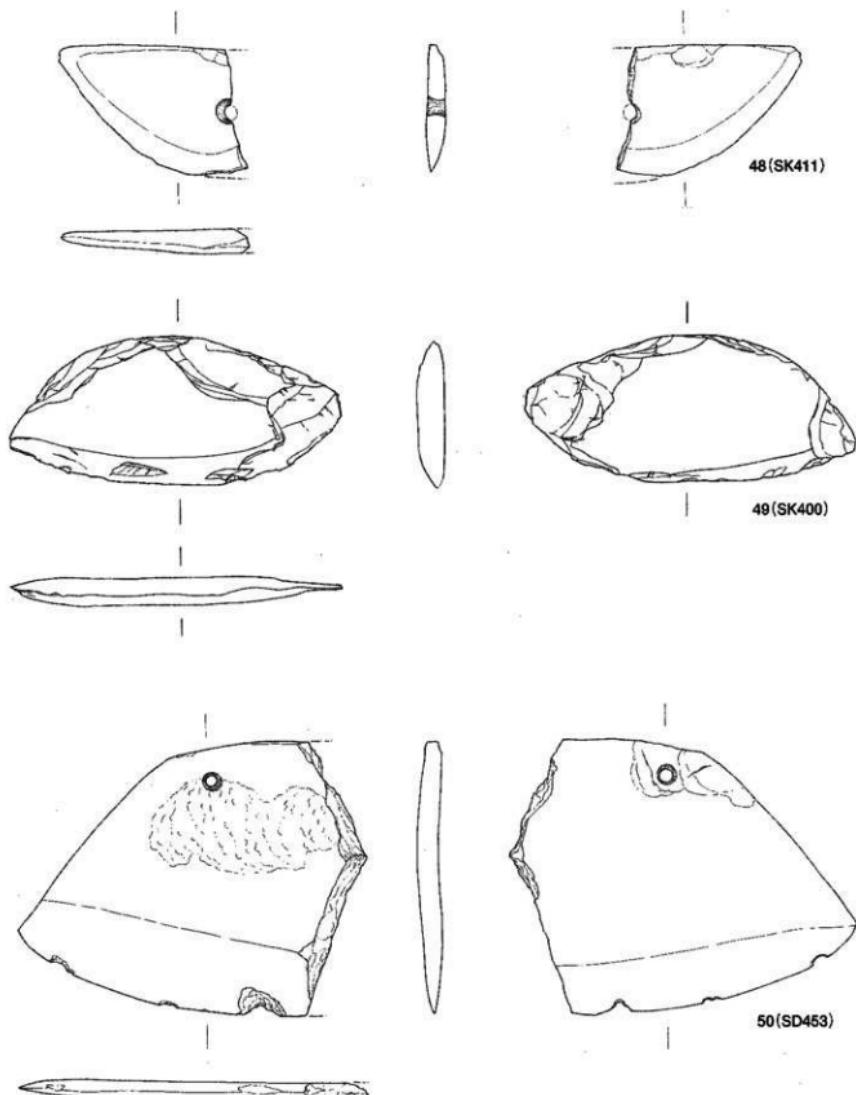
1



47(SK457)

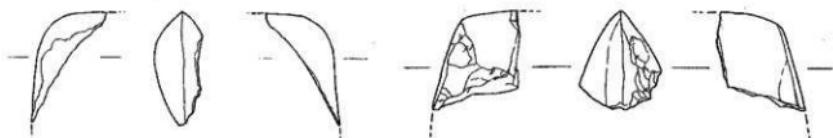


東奈良遺跡 出土遺物 (5)



0 1 : 2 10cm

東奈良遺跡 出土遺物 (6)

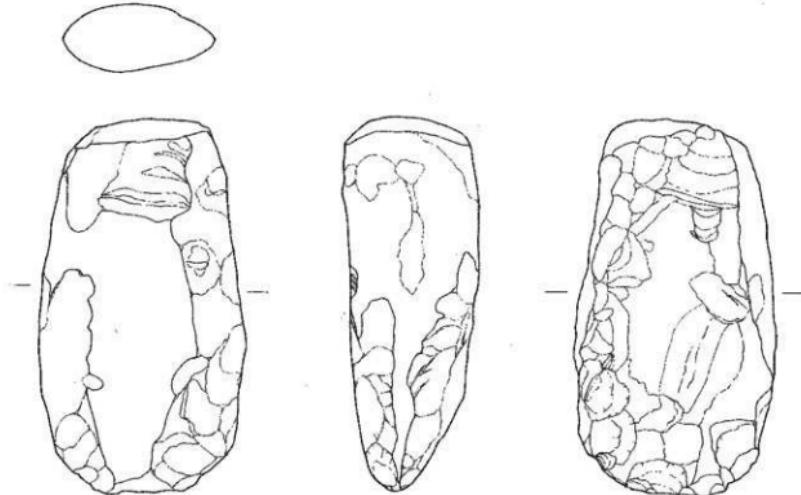


51 (SP4137)

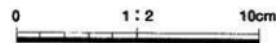
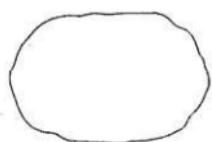
52 (SK422)



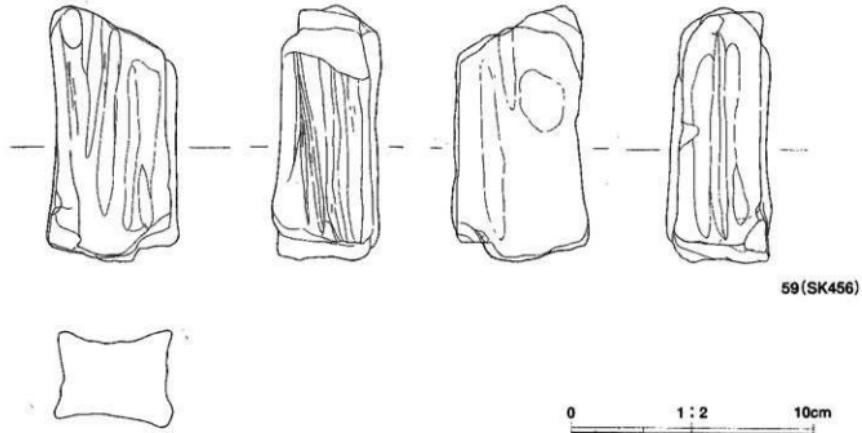
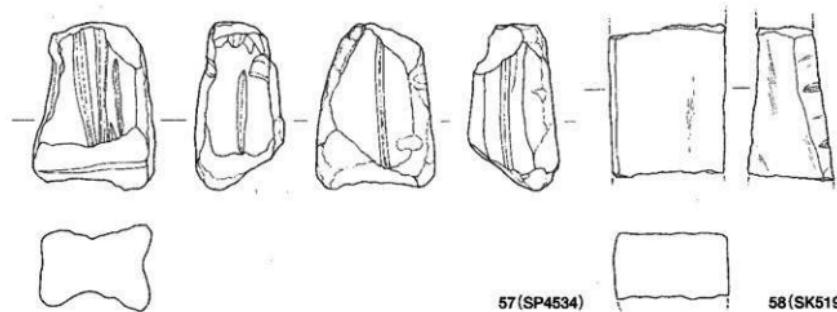
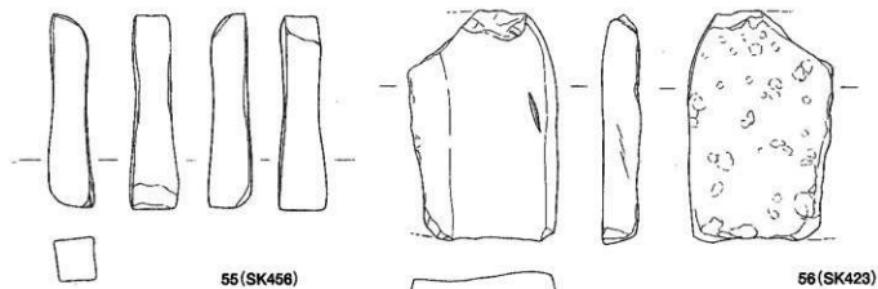
53 (SP4677)



54 (SD503)



東奈良遺跡 出土遺物 (7)



0 1 : 2 10cm

東奈良遺跡 出土遺物 (8)

段階のものと思われる。

25は長方形の容器状のミニチュアである。中央部分が大きくぼんではいる。全長4.9cm、高さ2.6cm、幅3.5cmを測る。

26はSP(柱穴)4161出土で器台や高壙状を呈し、中心部が直径0.2cm程度の孔が貫通している。脚部が内湾気味に大きく開くが、一部窓状にアーチがあいている。残存高は6.6cmで円筒部は直径1.6～1.9cmを測る。

27～35は石鎌である。27～29はSD321出土で平面形状が三角形を呈する平らな基部のものである。

27は先端部を欠損しており、全長推定3.0cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。

28も先端部を欠損しており、全長推定2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。

29は直径3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。

30はSK439出土の平面三角形の平基の石鎌で、直径2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。

31はSP4962出土の平面矢羽根状で基部が凹むタイプである。先端部を欠損しており、全長は推定3.5cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmを測る。

32はSD321出土で平面が柳葉形を呈し、基部は凸基である。全長3.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。

33はSD111出土で先端部を欠損するものの両面共に平滑に仕上げている。全長3.7cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。

34はSI(豎穴跡)400から出土し、先端部が突出して長く基部は凹んでいる。全長4.7cm、幅1.3cm、0.6cmを測る。

35はSD321出土で平面形は柳葉形を呈する。全長5.0cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmを測る。

36・37は石錐である。

36はSP5039出土で板状に薄く、錐部が棒状になる。全長2.7cm、幅0.5～0.8cm、厚さ0.2cmを測る。

37はSP4976出土で全長3.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。

38はSP4359出土のスケレイバーである。平面三角形を呈し、一側縁に両面から刃部調整が見られる。全長5.3cm、幅1.7cm、厚さ1.0cmを測る。

39はSK407から出土した碧玉製管玉である。緑灰色を呈する。全長1.4cm、直径0.3～0.4cm、孔径0.1cmを測る。

40は範状石器と思われ、縦長の剥片で主要剥離面が残存し、片面に刃部調整が二側縁に施される。全長8.9cm、幅3.3cm、厚さ1.2cmを測る。

41はSD523出土の石核である。こぶし大の楕円礫を用いて剥片をとっており、自然面はあまり残っていない。全長8.2cm、幅6.6cm、厚さ4.8cmを測る。

42はSK567から出土した石槍である。全体形は柳葉形を呈し、短い基部が付く。材質は片理質の石材を用いており、両面共に刃部調整を行っている。全長21.0cm、幅4.2cm、厚さ1.0cmを測る。

43～50は石包丁であるが、ほとんど穿孔部で欠損しており、折れて不用になったため廃棄されたと思われるものが多い。また、穿孔は中央部分に穿たれたものは1孔で、刃部と反対側の側縁付近に穿たれたものは多孔である。

43はSX400出土で穿孔部で欠損している。やや潰れた半円形を呈するものと思われ、先端は丸くなっている。残存長は6.9cm、幅4.7cm、厚さ0.7cm、孔径0.6cmを測る。

44はSD302出土で穿孔部で欠損している。細長い短冊形を呈するものと思われ、穿孔は2箇所以上に認められ、穿孔のやり直しが見られる。残存長は5.9cm、幅3.0cm、厚さ0.8cm、孔径0.5cmを測る。

45・46はSD451出土で欠損しており、45の残存長は5.4cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmを測る。46は残存長6.4cm、幅5.4cm、厚さ0.4cmを測る。

47はSK457出土で穿孔部で欠損している。残存長は6.9cm、幅4.7cm、厚さ0.7cm、孔径0.5cmを測る。

48はSK411出土で穿孔部で欠損しているが、およそややつぶれた半円形を呈するものと思われる。残存長7.9cm、幅5.3cm、厚さ0.8cm、孔径0.6cmを測る。穿孔は両面から行ったことが窺える。

49はSK400出土で、全体形が残っている唯一のものである。その形はラグビーボール状を呈し、片方の先端部分が剥離している。全長13.7cm、幅6.1cm、厚さ1.2cmをはかる。穿孔部が見当たらないことから、製作途中で廃棄されたものと思われる。

50は大型の石包丁でSD453から出土している。これも欠損しているが、残存長14.5cm、幅11.3cm、厚さ0.9cm、孔径0.5cmを測る。この孔はかなり刃部と反対側の側縁近くに開けられており、その配置から2孔であると思われ、穿孔時に表面が剥落したと思われる。刃部と反対側の側縁は平らに仕上げられている。

51～54は磨製石斧である。

51・52は先端部のみ残存しており、それぞれSP4637とSK422から出土している。

53はSP4677出土で下部が欠損しており、一部使用によるものと思われる剥離が見られる。残存長8.0cm、幅6.3cm、厚さ2.9cmを測る。

54はSD503出土で完形である。平面形は長方形を呈すが、先端付近がやや幅広となる。また、刃部と反対側の側縁に近い片面には柄に取付けたと思われる窪みが見られ、刃部は使用によるものと思われる剥離が顕著である。全長は15.5cm、幅5.6～8.5cm、厚さ5.3cmを測る。

55～59は砥石である。

55・59はSK456出土の砥石であるが、55は小型で仕上用、59は粗砥用と思われる。55は6面全面使用されており、全体形は短冊形を呈する直方体である。全長8.0cm・幅1.2～1.9cm、厚さ1.5～1.8cmを測る。石材は目の細かい泥岩で灰白色を呈する。全長10.6cm、幅4.8cm、厚さ2.9～4.0cmを測る。

59は両側端を除く4面を使用しており、条痕が確認できる。全体形は短冊形の直方体を呈する。

56はSK423出土で全体形は長方形で板状を呈する。1面のみ使用されており、条痕や擦り面が見られる。全長9.5cm、幅5.3～5.8cm、厚さ0.9～1.5cmを測る。

57はSP4534から出土しており、直方体を呈する。両側端を除く4面に使用が認められ、深い条痕が見られる。全長は6.9cm、幅3.7～5.0cm、厚さ2.5～3.5cmを測る。

58はSK519出土で両側端が欠損しているが、短冊形を呈する直方体と思われる。3面に使用が認められ残存する長さは6.3cm、幅4.7cm、厚さ2.6cm～を測る。

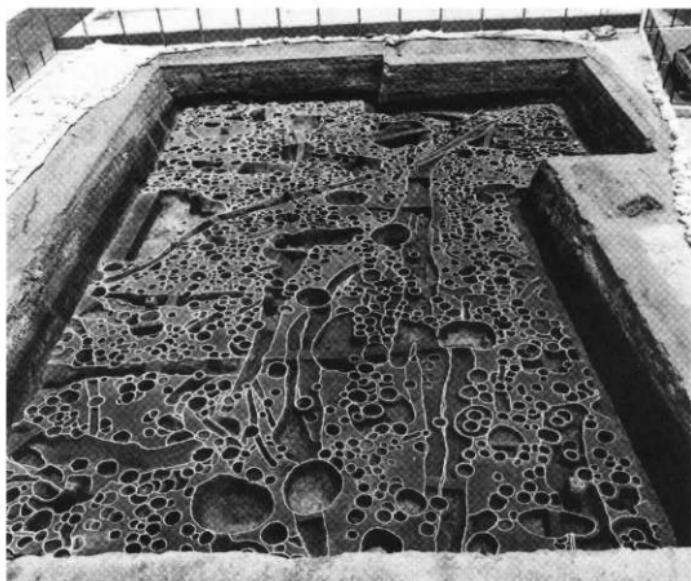
まとめ

今回の調査においてわかったことは、第5面及び第6面(地山)は弥生時代前期後半から中期初頭の

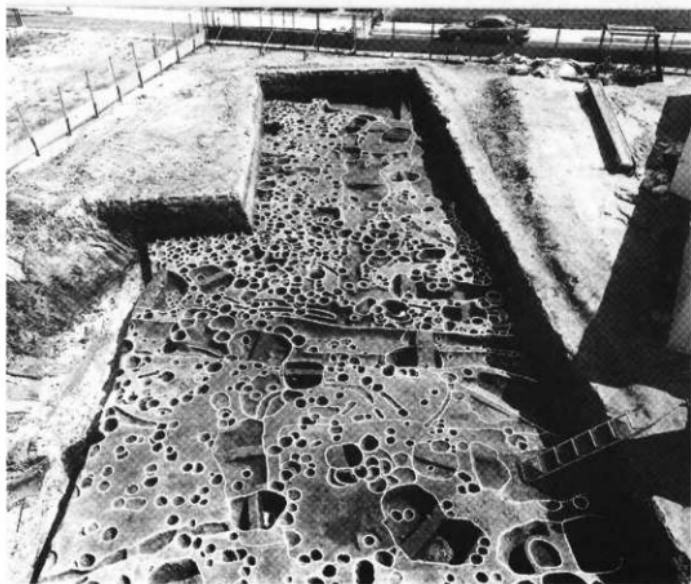
遺構群を主体としており、弥生社会が前期から中期に至る過渡的な段階であったことが言える。その結果、今回の調査位置を考えると弥生時代前期の2条の環濠の東域外縁にあたり、調査区南西隅にその環濠と考えられるSD451が若干かかっており、北西—南東方向に伸びている。この環濠の時期は弥生時代前期中頃に開削されたものと思われ、環濠の埋土の上層には中期後葉頃のものが含まれている。この環濠がいつの時期まで機能していたかについては更なる検証を必要とするが、前期後半段階にはSD451を代表とする2つの前期環濠の外側にさらに環濠が約50~60m程大きく広がりを見せることから、東奈良の集落域は前期後半から中期初頭にかけて大きな変化を迎えていくことが注目される。この事は今回の調査結果とそれ以前の調査結果にも反映されている。今回の調査では弥生時代前期後半の遺構が最も多く検出され、次に前期後半~中期初頭にかけての遺構が多い。時期が少しあいて中期後葉(IV様式)段階に遺構数がまた増加する傾向にあり、各時期に共通して言えるのは竪穴住居跡が確認できることである。前期後半の遺構群は溝及び長楕円形土坑、柱穴群で構成されている。特に長楕円形から楕円形土坑が多くその用途は不明なものが多いが、今回調査した中では土坑の底面付近に木が大量に腐った状態で検出されたもの(SK516/522)や炭化米がびっしりつまつた状態で検出された(SK447)土坑がある。これら土坑群はそれぞれが各々の機能や用途を持って構築されたことが窺える。例えば墓坑や貯蔵穴、廐棄穴等々であろう。前期後半~中期初頭段階では環濠(SD451)に沿うように約10m以上の距離をあけて土坑群が並んでいる。(SK458/460/455/454/SP5964/SK463/464/470/446/452等)明らかに環濠を意識した配置と考えられる。

この段階も前期後半同様に遺構群の構成にさほど変化は見られないが、土坑の形態が楕円形よりも円形タイプが増加したことが窺える。また、環濠の外側にこれほどの遺構群を構築することなどを考え併せてると、環濠の拡大はむしろこの時期には必要かべき事象であったように思われる。そして、中期後半段階では、これまでのような遺構数はないものの、溝、土坑、柱穴が主体となって遺構群を形成している。今回の調査では第5・6面として調査を行っているものの、前期段階の遺構は第5面から掘り込まれているものが多く、第5面と第6面の間には前期後半~中期初頭という極めて限定された期間に堆積・地表されたものであることが窺える。また、調査区の西側では一段地形が東側に低くなる段差を確認し、小川に向かって標高が下がっていることが改めて確認できた。

今回の調査に於いて出土した遺物量は合計2,003.6kgである。その内、土器量は1,893kgに及ぶ。次いで石器が80.4kg、木器が20.2kg、骨4.6kgの順である。土器量は m^3 当たり2.97kg/ m^3 であった。石器の内訳はチップ(石器屑)66点、フレーク(石器屑)86点、コア(石核)22点、スクレイパー(搔器・削器)76点、ナイフ4点、石鎌25点、石錐6点、石ペラ2点、石槍8点、磨製石斧47点、石包丁43点、砥石75点、その他68点(管玉1、石皿2、つぶて2、棒状石製品5、擦り石・敲石13、石製品等)、自然石(石材)78点となっており計606点を数える。ここで注目されるのは砥石・石包丁・磨製石斧の多さで、砥石については75点を数え、背景には間接的に金属器の多さを象徴するかのようであるが、金属器はというと銅鑄が1点包含層から出土したのみであった。今後、さらに検討を深め、この地域の様相を明らかにしていく事が望まれる次第である。



東調査区
第5面全景
(西から)



西調査区
第5面全景
(北から)

第11図 東奈良遺跡 第5面遺構検出状況



東調査区
第6面全景
(西から)



西調査区
第6面全景
(北から)

第12図 東奈良遺跡 第6面遺構検出状況

春日遺跡

所在地 茨木市春日二丁目189-1

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成14年5月24日～平成14年8月7日

調査面積 1,261m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

春日遺跡は、弥生時代から中世・近世にかけての複合遺跡である。当遺跡の周辺は、北には弥生時代中期から後期、古墳時代から中世にかけての集落跡である郡遺跡、また、北東には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である倍賀遺跡と接している。地形的には、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に位置している。



これまで昭和47年から平成12年の間に19か所の調査が行われている。特に、平成に入ってからは断続的に発掘調査が行われている。なかでも平成8年に行われた調査（1次：上穂積一丁目2-1、2次：同一丁目156・160・195-1）において、1次では、古墳時代後期の埋没墳（円墳）を、また、2次でも古墳時代後期の埋没墳（円墳）3基を検出し、上層からは摩滅した埴輪のほか、周溝の底からは地山に接する形で衣蓋形埴輪立築りが出土している。

本調査は、平成14年5月24日から共同住宅の構造物が建築される部分の調査地の区割りとして、調査区の南側より順に「第1調査区」、「第3調査区」とし、また、ピット式駐車設備の部分においては、「第2調査区」とした。

平成14年5月27日より第1調査区を、5月29日より第2調査区の順に、また、残土処理の部分の確保のため、第1調査区内の南側のところに掘削作業時に出た土を盛り、一時的に置く事とした。また、7月22日から第3調査区の調査を実施した。

なお、第1調査区は、東西15×南北30.7mの約460m²、第2調査区は、東西4.3×南北36.4mの約156m²、第3調査区は、東西14×南北7mの約98m²の面積を調査の対象とした。

基本層序は、第3調査区において、上層から盛土層（約20～54cm）、耕土層（約12cm）、暗褐色砂質土層（約10cm）、黄茶褐色砂質土層（約10cm）、暗黄褐色砂質土層（約14cm、地山層）となる。この他の第1調査区および、第2調査区においても先に挙げた第3調査区にほぼ準ずる。

調査の結果、第1調査区では、調査区の東北部の端に位置している溝SD-15において、須恵器の完形品が出土している。この溝は、調査区の北側から東側にかけて掘られていた。高低差から、北から南に向て流れていることがわかった。この溝から出土した須恵器は、茶褐色砂質土層中に含まれていた。この他の遺構には、調査区の南西側から北側にかけて、幅約1.7mから

2.2 m の大溝 S D - 01 を検出した。この溝の北側部分において、ほぼ完形の須恵器の蓋（一部破損）が出土している。この須恵器の蓋は、溝の中央より西側に捨てられた状態で見つかっている。

なお、S D - 01 はレベルで測定した数値から、さきに示した S D - 15 同様に北から南西に向かって流れていることがわかる。この S D - 01 に関しては、北側から南西端に向かって巡るよう伸びていることから、条濠（1 条の単独で巡らない溝）というより、環濠のような性格を持つたようなものと考えられる。第 2 調査区のところでも述べるが、堀立柱建物跡と考えられる遺構や、柵列が複数検出していることから、それらを囲むようにして、溝が巡らされていたのではないかと考えられる。

第 2 調査区においては、調査区の北半部において堀立柱建物跡と考えられる遺構を 3 棟、柵列もしくは堀立柱建物跡と考えられる遺構が 1 棟、もしくは 1 基を検出している。また、調査区の南半部においては、柵列あるいは堀立柱建物跡と考えられる遺構を 1 棟あるいは 1 基を検出して いる。

ただし、これらの柱穴からは、遺物が出土していないため、時期は明確には判断できない。しかし、これまで今回の調査地の周辺の発掘調査の事例などから考えると、おおよそ中世の頃のものと考えられる。先述の S D - 01 の溝が第 2 調査区の調査範囲の外側を巡っているものと思われたが、同調査区からは検出できなかった。堀立柱遺構や柵列遺構と考えられる遺構からすると、おそらくこれらの遺構を取り囲んだ環濠のような性格を備えた大溝だと考えている。

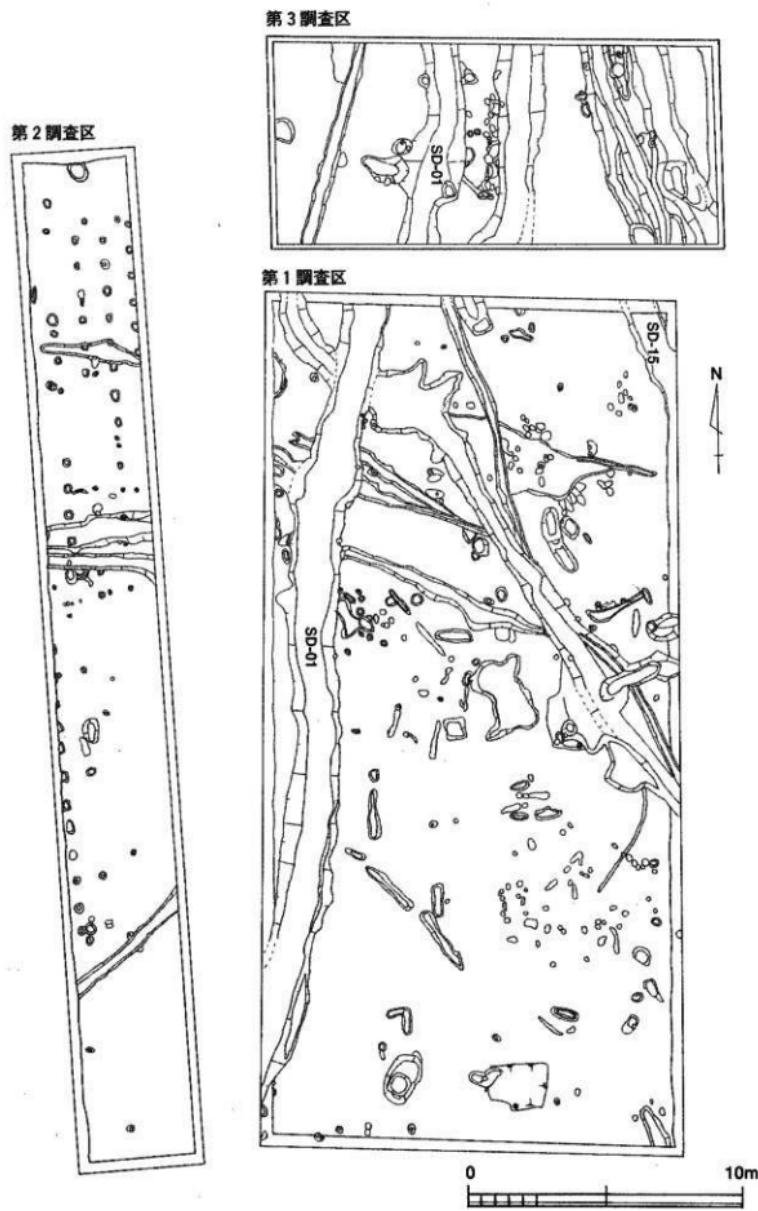
第 3 調査区においては、主な溝を 6 条検出している。このうち S D - 02 は、検出した位置や規模の大きさなどから、第 1 調査区の S D - 01 と繋がるものと考えている。

まとめ

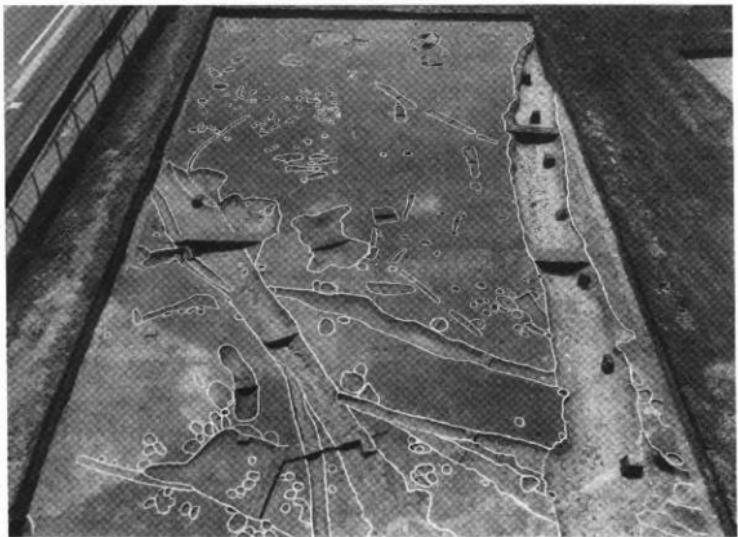
今回の調査で、第 2 調査区から検出した堀立柱建物跡や柵列と考えられる遺構を取り囲むように、第 1 調査区から第 3 調査区にかけて伸びている、環濠のような性格を備えたと考えられる溝 S D - 01 が巡っていることが分かった。このことから、S D - 01 は建物群と他とを区画する意味合いがあったのではないかと考えられる。今後の周辺地域での発掘調査に期待したい。

参考文献

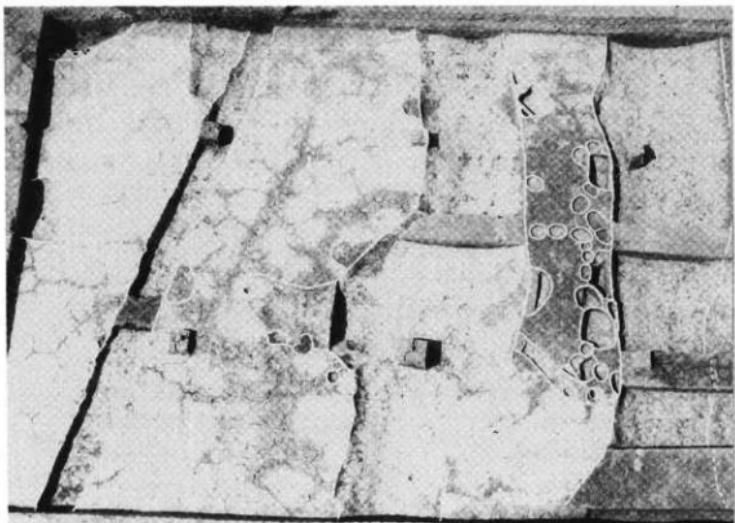
茨木市教育委員会編「平成 8 年度発掘調査概報」平成 9 年 3 月



第13図 春日遺跡 遺構平面図

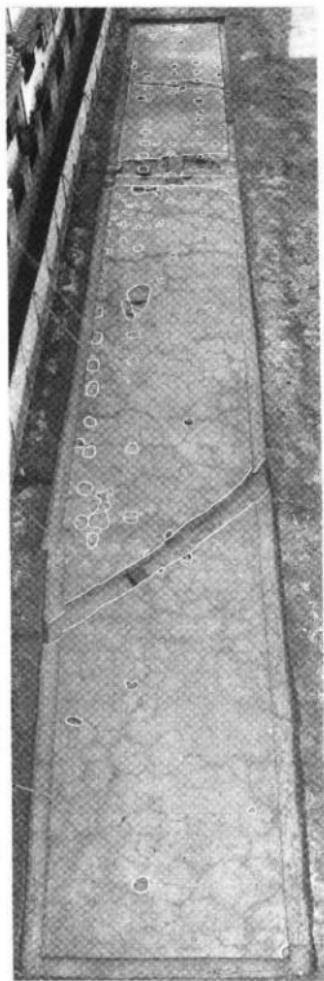


第1調査区 遺構完掘状況（北から）



第3調査区 西半部 遺構完掘状況（南から）

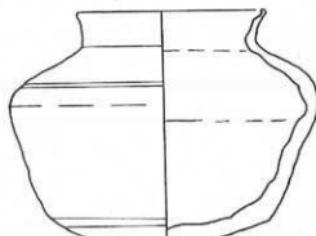
第14図 春日遺跡 遺構検出状況



第15図 春日遺跡 第2調査区
遺跡検出状況（南から）



春日遺跡 第1調査区
SD-15 壺出土状況（北から）



SD-15 出土壺



遺構面直上包含層出土土器



第16図 春日遺跡 第1調査区
出土土器実測図

牟礼遺跡

所在地 茨木市末広町 913-2

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成14年6月17日～平成14年8月9日

調査面積 669m²

調査担当 中東 正之

調査結果

調査対象地は、昭和60年に縄文時代晚期の水田関係遺構が検出された、ジャスコ新茨木店の北方約300mに位置する。当地区は、比較的早くから市街地化していたが、近年再開発に伴う発掘調査が続いている。古墳時代前期から中世に至る水田跡や集落跡が確認されている。平成13年度調査では、ジャスコ新茨木店の北東約200mのマンション建設予定地で、弥生時代前期の遺構や、縄文時代晚期の遺物が検出されている。本調査は、試掘調査の結果をうけ、中世遺構面の確認を目的とした。調査は南北の調査区に分割して実施し、平安時代後期から鎌倉時代の遺構面を検出した。

基本層序は、盛土、旧耕土、3層の中～近世包含層、暗褐色砂質土（平安時代後期から鎌倉時代の包含層）、地山層となる。旧耕土以下、床土は張られておらず、遺構面のベースとなる地山層に至るまでシルト質で軟弱な堆積を呈す。遺構検出は、地山層上面で実施した。遺構面については、北方に向けて安定かつ微高である。

検出遺構は、平安時代後期から鎌倉時代の、溝・鉄溝、柱穴群、土坑等である。柱穴は約360基を数え、重複するものも多い。建物としては、柱間隔が不揃いであるため、確定を避けたが、数棟の堀立柱建物と柵列の存在が推測される。調査区南端部では、東西方向の溝（S D-32）を境に柱穴等の遺構は減少する。地形的にも境界を示しており、水田面もしくは低湿地と推測される。

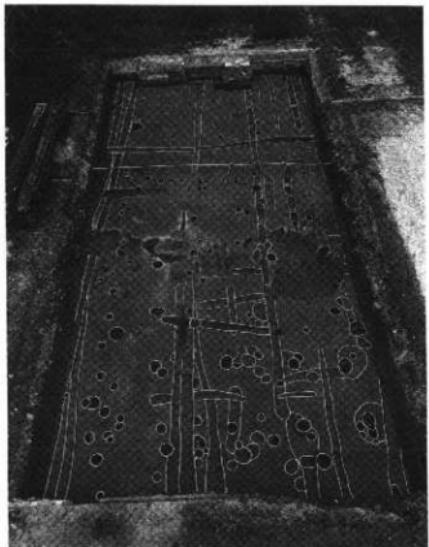
出土遺物は、コンテナパッド4箱である。弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、黒色土器B類、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器などがある。ほとんどが摩耗した破片で、上流（北方）から流れ込んだものが多いと判断される。

まとめ

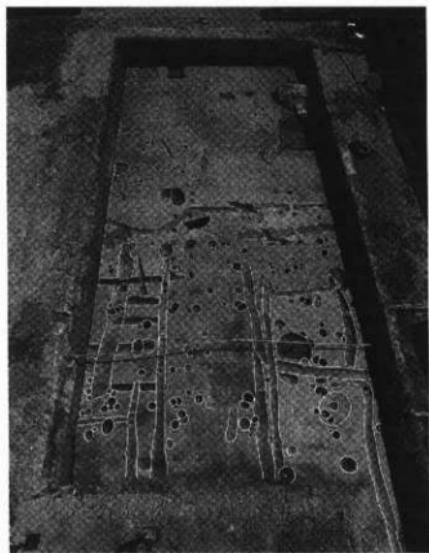
調査の結果、牟礼地区の中世集落の一端を明らかにすることができた。当地は、居住域の南端部にあたるとみられ、北へ展開するものと推測される。しかし、該当する方面での試掘結果をみると、湿润な様相に変わりではなく、当地の中～近世包含層に相当する層位は、ほぼ普遍的に認められるものの、遺構面のベースとなる土層は捉えられていない。

本遺跡は、安威川右岸の低湿地に成立した集落跡であり、複雑な地形上に立地していたと推測される。そのため、全容を捉えるには、広範囲な調査が必要であると思われる。

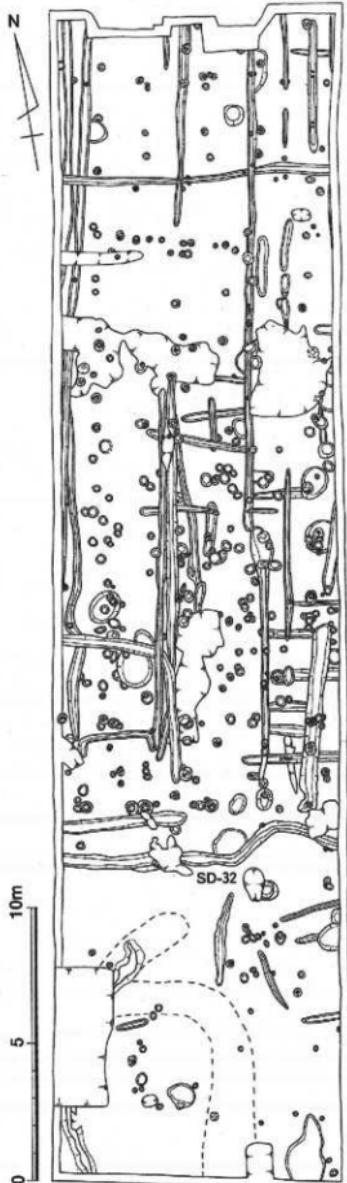




第1調査区（南から）



第2調査区（北から）
第17図 牟礼遺跡 遺構面検出状況



第18図 牟礼遺跡 遺構平面図

郡山遺跡

所在地 茨木市郡五丁目867

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成14年9月3日～平成14年10月3日

調査面積 449m²

調査担当 中東 正之

調査結果

調査対象地は、千里丘陵の最北東端にあたる郡山から、亀岡街道にかけての東斜面に位置する。郡遺跡、郡山遺跡、中河原遺跡が端を接する当地区では、平成6年からの区画整理事業以来、多くの発掘調査が実施され、弥生時代から中世に至る集落跡であることが判明している。平成9年、当地の北隣のマンションで調査が実施され、弥生時代中期の方形周溝墓と、奈良時代の建物の一部と思われる柱列が検出されている。当地の試掘調査では、当該期の包含層はほとんど削平状態にあることが確認されたが、遺構面は良好な状態であると判断され、調査を実施した。



基本層序は、現代盛土、旧耕土、床土、褐灰色砂質土、暗褐色砂質土（古墳時代後期から奈良時代の包含層）、明黄褐色粘質土（地山層）となる。遺構検出は、明黄褐色粘質土上面で実施した。検出面は西から東に下る緩傾斜を示す。

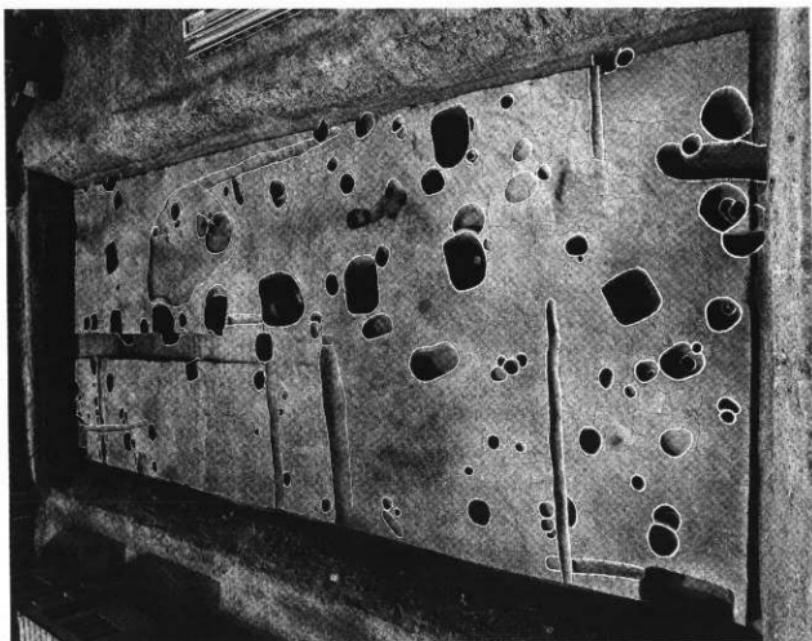
検出遺構は、溝10条、土坑1基、柱穴・ピット124基を数える。堀立柱建物は、東西7間×南北2間の東西棟で、柱間は東西2.9m、南北2.6mを測る。庇や縁については、建物の北側が調査区外に至るため不明であるが、南北柱筋に沿って一部拡張したところ、身舎については2間にとどまることが確認した。柱堀方は一辺1～1.4mの方形を呈する。深さは70cm前後を測り、根石と礎板が施されている。また、柱根は残っていないが、抜き取りの痕跡が認められるものもある。埋土内の遺物より、奈良時代前期の建物と推測される。

S K-1は、浅く不定形の土坑で、建物と重複する。埋土中より、6世紀末頃の躰、坏蓋などが出土した。

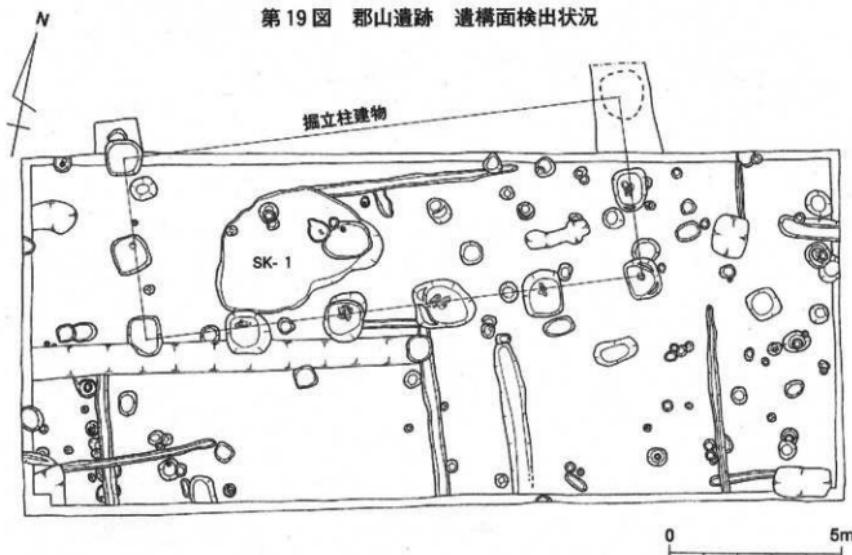
出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器のほか、円筒埴輪片などがある。瓦類はまったく出土しなかった。遺物総量は、コンテナパッド3箱（根石・礎板）である。

まとめ

調査の結果、奈良時代前期の建物などを検出した。当地区周辺で検出されている同時期の建物の中では大型の建物である。北隣のマンションで検出された同時期の柱穴列も、方向性を同じくしており、まとまった建物群の存在が推定される。弥生時代から古墳時代前期の遺構については、北隣にくらべて急激に減少しており、同時期の集落域の南限を示している可能性がある。また、当地の南方、郡遺跡の包蔵範囲でも、飛鳥・奈良時代の集落域が検出されている。これとの関連は今後の調査例の増加を待ちたい。



第19図 郡山遺跡 遺構面検出状況



第20図 郡山遺跡 遺構平面図

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目418-1他

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成14年6月24日～平成14年9月5日

調査面積 280m²

調査担当 中東 正之

調査結果

調査地は、東奈良土地区画整理地区内に位置する。当地区は東奈良遺跡の包蔵範囲のほぼ中央部にあたり、弥生時代前期から古墳時代前期の環濠集落跡の中核部に該当する。平成10年から平成12年にかけて、区画整理に先立つ道路部分の発掘調査が実施され、弥生時代前期の環濠3条と、弥生

時代中期の環濠2条が巡る集落の全容が徐々に明らかとなってきた。

環濠の内外から、多数の遺構・遺物が検出されているが、特筆すべきは、中期の環濠の溝底より、小型銅鐸が廃棄された状態で出土したことである。

当地は、弥生時代前期の環濠の推定方向に該当しており、この溝の検出を主目的として調査を実施した。

当地区では、先の区画整理事業で盛土がなされており、現地表面は標高8.45mを測る。旧耕土下、標高7m付近には堅固に叩き締められた整地層がある。この整地層は、当地区には普遍的にみられ、奈良時代頃のものと思われる。整地層下には、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の遺物を包含する黒褐色粘質土がある。以下、第1遺構面（標高6.8～7.0m）である弥生時代前期後半の遺物を包含する暗黃灰色粘質土、第2遺構面（最終面、標高6.6～6.9m）である明黃褐色粘質土（地山層）となる。

検出遺構は、弥生時代前期後半、弥生時代中期後半、後期、古墳時代前期初頭（庄内式土器併行期）、飛鳥・奈良時代、中世、近世のものがある。

第1面は、弥生時代前期の環濠が廃絶された上面に成立した遺構面である。弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭の溝8条、井戸3基、土坑8基、柱穴400基以上を同一面で検出した。柱穴は、直径0.15～0.3m、深さ10cm程度が主体で、各時期の堀立柱建物や柵列を示していると思われるが、その確定には至らなかった。井戸（SE-1～3）は、直径1～2m、深さ0.8～1.2mを測り、調査区東部で集中して検出されているが、共に底部から完形の庄内式土器が出土している。井戸は他にも、調査区西部で2基の近世井戸を確認しているが、これらの井戸も、廃絶された環濠に重複するように位置している。

第2面（最終面）では弥生時代前期後半の環濠、溝約30条、井戸1基、土坑約20基、柱穴



500基以上を検出した。環濠は、調査区を概ね東西に縦断している。溝幅約4mを測り、2段の壠形を呈すが、深さは1.1m程度と浅く、底面に比高差は生じていない。埋土は7層のレンズ状に分かれるが、中位の層においては、弥生時代前期後半の土器群や木製品がまとまって出土している。中位より上層には、炭化物が多量に混入している。特に、SX-1と接する付近で顯著であり、炭、焼土、木材などが縞状に堆積している。また、なんらかの鉱石の再結晶物もみられ、炉の廃棄物を投棄したかのような状況を呈しているが、羽口、坩堝等、鋳造に直接結びつく遺物は出土しなかった。環濠の下層は、ある程度水が流れている形跡がある。着底状態の完形土器や木製品もわずかに出土しているが、中層の土器群との時間差はほとんど認められない。

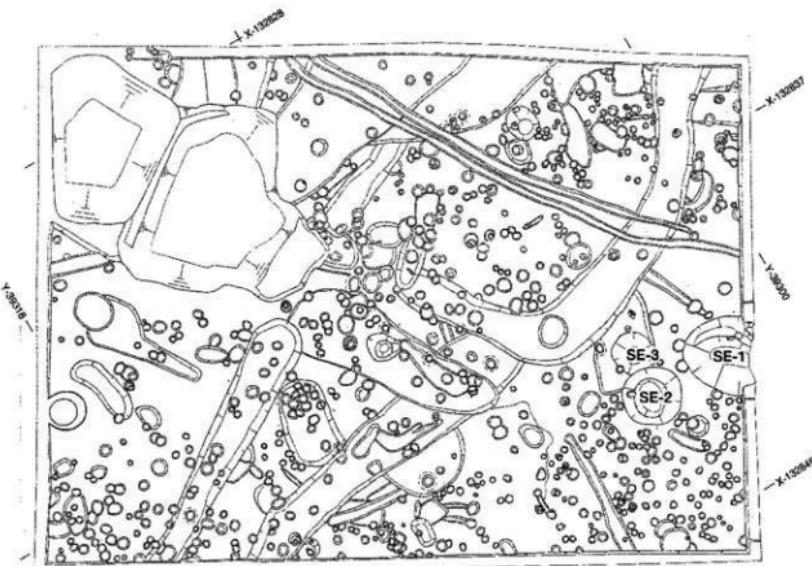
SX-1は、環濠の南縁に位置する不整形な遺構である。全体としては調査区外に至るため不明であるが、東西10m程にわたっている。環濠に向けて緩傾斜がつくような壠形を呈しているが、中央部には粘土の張り床が施されて平坦面を得ている。深さは張り床面で30cm程度である。覆屋等が施されていたかは不明である。SX-1内西端部の高い位置には長軸1.4m、短軸1mの焼土坑があり、中央部環濠沿いの張床面では、焼土塊のまとまった堆積が検出された。埋土内の遺物は、炭化物や弥生前期後半の土器片で、鋳造に關係あるとみられる遺物は出土しなかった。また、SX-1内東端部には井戸(SE-4)がある。隅丸方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.8mを測る。層位的にみて、SX-1に付随したものと推測される。

出土遺物は、整地層、包含層、環濠内などから出土した壺類、甕、鉢、瓶、高杯、器台などの弥生土器が大半を占める。時期は、前期後半と中期後半がボリュームゾーンとなっている。庄内式土器は比較的少ないが、井戸内の完形品などが目立つ。木製品は環濠内から、石製品や石材、銅鏡などは主に整地層・包含層から出土している。他に飛鳥・奈良時代の上飾器、須恵器、中世の瓦器、陶磁器などがある。

まとめ

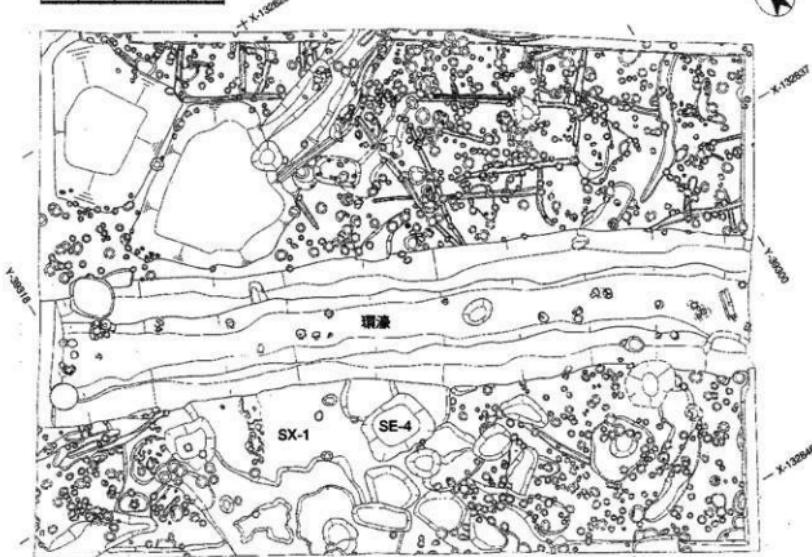
最終面で弥生時代前期後半の環濠が検出された。この環濠は、前期の3条の環濠のうち、最も外側を巡るものであるが、その変遷の一端を窺うことができた。当地では、中期後半には、前期の環濠は完全に廃絶されていたことが判明した。また、柱穴等の遺構密度をみると、環濠の存続時期においても、環濠の内外で差異はなく、急激な人口の増加等、集落規模が拡大していった様相が窺える。環濠は、当初は本来的に機能していたものと推測されるが、ある時期から廃棄場所となっていたものと判断される。SX-1はなんらかの工房と推測されるが、その内容は不明である。水利や廃棄物処理を考えて環濠縁に造られ、環濠と共に廃絶されたものと推測される。今後も当地区では開発が予定されており、環濠内外、とくに集落の中心部の発掘調査が実施され、その全容が明らかになることを期待したい。

※註 平成13年度調査の東奈良遺跡調査において、当地(東奈良遺跡地区割りC-6-M地区、D-6-A・B地区)および東奈良三丁目405-2他(D-6-I・J地区)における出土遺物に対し、土器および石器類の計量分析が試みられた。その結果、土器総量は1398kgで1m³あたり4.99kg、石器類総量は13.6kgで1m³あたり1.398kgの出土量を測る。尚、排土中の遺物は計量に含まれていない。



第一遺構面

0 5m



第二遺構面

第 21 図 東奈良遺跡 遺構平面図



第一遺構面全景

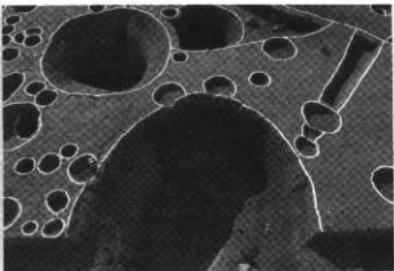


第二遺構面全景

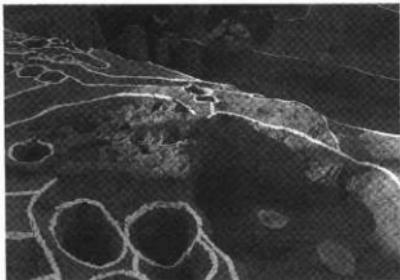
第22図 東奈良遺跡 遺構面検出状況



第一面 SD-2 ほか (南から)



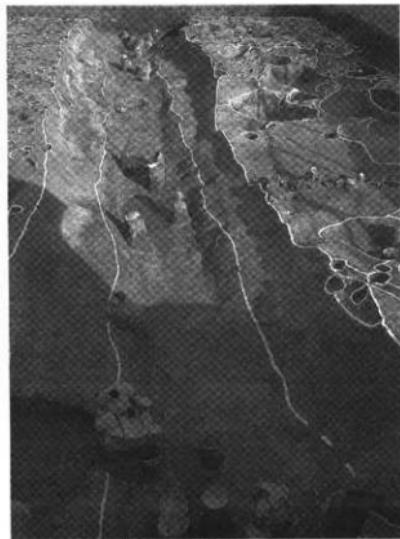
第一面 SE 1~3 (東から)



第二面 SX-1 内 焼土坑他 (南から)



第二面 环濠内土器 (南から)



第二面 环濠 (西から)



第二面 环濠 (東から)

第23図 東奈良遺跡 各造構検出状況

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目 413-1 他

調査原因 保育所建設工事

調査期間 平成 14 年 6 月 27 日～平成 14 年 8 月 7 日

調査面積 234 m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は、東奈良遺跡のほぼ中心に位置している。

遺構面 3 層を確認することができた。

第 1 遺構面

第 1 遺構面は、古墳時代以降の遺構を検出した。

溝一Ⅲは途切れた状態で検出された。幅が 18cm、深さが 4 cm

である。溝一Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ～Ⅶは、いずれも幅が 11～18cm、深

さが 4～5 cm である。土坑状であるが、溝一Ⅲと平行した状態で検出され、堆積状態が同じであることから溝と考え鋤溝の一部だと考えられる。

溝一Ⅷは、幅が 75cm、深さが 17cm の方形に巡る状態で検出された。溝内より須恵器、及び弥生土器が出土した。

溝一Ⅸは、幅が 42～85cm、深さ 23cm でやや弧を描きながら検出された。溝内より須恵器、土師器及び弥生土器が出土している。

土坑一Ⅰは、短径 73cm、長径が 1m 43cm、深さ 32cm の不整の椭円形の状態で検出された。土坑内より、須恵器の細片が出土した。

その他、溝一Ⅸ内に 2、外に 3 の径 20～30cm の円形の柱跡を検出した。柱跡一Ⅰ、Ⅱから須恵器の細片が出土した。

第 2 遺構面

第 2 遺構面で検出した遺構は、柱跡、土坑、溝である。

柱跡は、円形であり、径が 20～30cm、径が 30cm 以上のふたつに分けることができる。しかし、埋土から出土する遺物から時期差は考えられることはできない。

土坑一Ⅰは、短辺が 2m 5cm、長辺が 6m 80cm 以上、深さ 25cm の隅丸方形の土坑である。土坑の埋土から弥生時代後期の土器が整理箱に 2 箱出土した。

土坑一Ⅱは、径が 1m 40cm の円形をしており、一部欠けた状態で検出された。埋土から弥生時代後期の上器及び古墳時代の古式土師器が混在した状態で出土した。

土坑一Ⅲは短径が 1m、長径が 1m 35cm、深さ 22cm の不整の椭円形の土坑である。埋土から弥生時代後期の土器が出土した。

